

『おろい、音無君。』と言ひながら入つて來た覺也は餘程興奮してゐた。

『どうだつた君、結果は？』

『結果も何も無いサ、五百圓の罰金だ。』と身を投げるやうに疊の上にとつかと坐つて、『僕は廢刊届を出したよ。新聞の……』

『うん、さうか……』と言つたまゝ音無は沈黙してゐた。

『僕は新聞で論説を書く位の事で以つて満足出来なくなつた。こんな下らない矛盾だらけの世の中を改革するには強烈な意識を有つた犠牲者が出なければならぬ……僕は田原先生の態度に不満を抱く、あれだけの貧民の友であり社會の先覺者でありながら、中途半端に忽然と姿を隠したなんて、僕は先生の爲に惜む。そりやア、君に言はずれば萬事が宿命だとか運命だとか言ふだらうが僕にはそんな事は信じられない。僕は僕自身の努力によつて、此世にミレニアムの現出ができると思ふ。人間から自由意志を奪つてしまつたなら、もう我々は石ころも同様だ。』

僕には差當り僕の自由意志に隨つて爲すべき事業がある、僕は今一寸の猶豫も出来ない一事業がある……』

『猶豫の出来ない事業？』

音無は眼を見張つた。

『うん、直接行動だ。僕は僕の自由意志に隨つて……』

『直接行動？ それはどんな事だい？』

『先づ僕は、僕の手で僕自身の至福時代ミレニアムを造るのサ。』

『何の事だか僕にはわからない、もつと具體的に説明してくれ給へ。』

『別に説明しないで置かう。僕は失つた物を自ら奪ひ還すのだ、僕自身の努力で。』

『では君、須基子さんに對して何とかしやうと云ふのか。』

『夫以上は聞かないで絶対に僕の自由に一任して置いてくれ給へ。』

『さうか、では僕は君の意志を尊重しよう。しかし君、注意に注意しなければ……』

『有難う、僕も其邊は能く心得て居るから安心してくれ給へ。』

『では其の罰金の方は僕が此間ナオミさんから預つた金で處分して置く。夫れから新聞社の後始末は？』

『新聞社は清水君に一任して置いた。清水君が別に隔日刊行の新聞を出すだらう。新聞社の在來の貸借を相殺して總ては清水君に任してしまつたから君に面倒はかけない。』

『では新聞社と全く縁が切れたんだネ。君は？』

『うん、今日から僕は全然自由の身だ。』

『さうか、そして君はまだ此町に暫く居る？』

『それはわからない、僕は僕の意志の動くまゝに行動するから。』

『解つた。萬事君の心は僕に解つてゐる。田原さんの家出を引止める事の出来なかつた僕は、やつぱり君をも強いて引とめようとはしない。田原さんはあアして總てを振捨てゝ出て行つた事を宿命の力に引ずられたのだと云つたが、君は君の自由で出て行くといふのだらう。僕には唯さうした人間の運命を靜かに眺めてゐるより外に何の策も無い。』

『有難う。僕も君の意志を能く知つてゐる。だからたとへ僕が何所へ行かうと、時々君に安否

だけは消息する、又時によると君の御世話を頼まねばならない事があるかも知れない……』

『それは御互ひだから。』

『では、失敬するよ君。僕は今日中に下宿を引拂ふつもりだから、事によつては今晚此家へ來るかも知れないよ。』

『あゝ來給へ〜、暫く一緒に居ようぢやないか。』

『さよなら……』

覺也は入つて來た時とは違つて餘程冷靜な態度で起つ上つた。

『君、君、一寸待ち給へ、これはネ、此間ナオミさんから預つた金だ、ナオミさんは君の事件が纏れて行つた時、辯護料もいるだらうし……といふ好意から僕に預けてあつたのだ。これを此のまゝ持つて行つて其罰金を納めて置き給へ。』

音無は机の抽出しから紙包みを取り出して來て、夫れを覺也に渡した。覺也は一寸躊躇してゐたが、

『では當分借りて置かう、僕は今朝貯金を少し取出したんだけど……』と云つて、それを懐に

入れた。

『さやうなら、荷物を直ぐ送つて來給へ、待つてゐるから。』

『有難う、直ぐ俵で送るよ。』

覺也はサツサと下宿の方へ歸つて行つた。

音無は読みかけて居た舊約全書の次を讀續けて、スリヤのナアマンが預言者エリシヤを訪問した記事を次の日曜の説教題にしようと思つて夫れを頻りに考へて居る所へ、覺也からの荷物が届いた。大きな行李が二つと机と本箱が二つと蒲團が一組とであつた。

三時四時になつても覺也は見えなかつた。五時頃になつてもマダ見えないので、下宿までブラム／＼歩いて行つて見ると、下宿のかみさんが出て來て、

『石塚さんですか、石塚さんは二時頃に勝浦の方へ俵で行らつしやいました。』

『勝浦へ？ 今晚歸るつて言ひましたか。』

『いゝえ、もうこゝは御引拂ひになりました。多分今晚七時の汽船で大阪の方へ御立ちになるんでせう？』

『さうですか、そんな事を言つてゐましたか。』

『はつきりとは仰しやいせんがしたが、勝浦の商船會社へ電話をおかけになつてゐたやうでしたから……』

『あゝさうですか……』と言つた音無の心には一種の不安が浮んで來た。

覺也が勝浦へ着いたのは四時半頃であつた。マダ乗船まで三時間もあると云ふので、小舟を頼んで赤島温泉へ渡つて行つた。左手の二階座敷に案内されて開放した窓から海の方を眺めてゐると、廊下の所から靜かな寢音が聞えて、

『まア、石塚さんぢや無くツて？』と聲をかけたのは時子であつた。

『あゝ、時子さん、』と言つたまゝ覺也は張裂けるやうな胸を抑へてぢつと其の顔を見詰めてゐた。

『御免下さいナ、本當によい所でお眼にかゝりましたネ。』と言ひながら入つて來た時子は覺

也から三尺ばかり離れた所に坐つて 『先達では本當に失禮致しましたワネ、丁度いろんな問題が起つてゴタ／＼してゐた時だつたので……』

『えエ、遺憾なく玄關拂ひを食はされまして……』

『まアそんな事を仰しやらないで下さい。實はあの時……』

『御辯解はもう十分です、私にはちやんと萬事がわかつてゐますから。』

覺也は時子の言葉を打切つて、語を續けさせまいとした。

『辯解ぢやありませんが、事實は事實として一通り申上げて置かなければ、』

『事實は何とした所で事實です。僕と太地家とは玄關拂ひをされるやうなそんな間柄ぢやアありません。』

覺也の聲が少しく顫へてゐたので、機を見るに敏な時子は、暫く黙つてゐたが、

『失禮ですが、私、あなたが、これからどこへ行らつしやるか能うく存じてゐますワ。』

『それがどうしたと云ふんです？』

『どうも致しませんが、あなたは須基子さんにお會ひなさらうと思つてらつしやるんでせう？』

圖星を指された覺也はグツと行詰つたが、思ひ切つて、『さうです。』と言ひ放つた。

『ではネ、石塚さん、私、本當にあなたのお力になりますワ。』

『力に？ それはどんな事です？』

『あなたの目的が達しられるやうに及ばずなら……』

『目的が達しられるやうに？ いゝ加減な事を仰しやい、訪ねて行けば玄關拂を食はせて……』

そして當人を遠方へ隔てゝしまつて、そして今更力になるツて？』

覺也は冷笑するやうに言つて肩を聳やかした。

『まア靜にお考へ下さい、あなたは確かに須基子さんを愛して居なさるが、若し須基子さんに

あなたを愛する心がまだ萌もしてゐないとすれば、どうなさるんです。』

『それはあなたのいらぬお世話です。』

『いゝえ、さうぢやアありませんワ、第一此の縁談といふのが、太地のおツ母さんと、田原さんとあなたとお三人きりで纏めた話なんでせう。肝心の須基子さんはマダほんのネンネエで、愛も戀もありやアしませんワ。』

『須基子さんと僕との問題は僕と須基子さんと二人できめます。僕はもう第三者の手を煩はさない！』

『夫れは亂暴ですワ。石塚さん、もう暫くお待ち下さい、須基子さんはマダ何にも知らないんです。あなたが太地家へ入籍するツて事も知らないんです。あの無邪氣な初心ちよぶな小娘を脅かすのは、そりやア残酷です、ね、石塚さん私……本當にお願ひですから、暫くお待ち下さいまし。』

『僕はもう直接行動を執る事に決めたのです。僕の自由は何人も妨害する事を許しません、どうぞあなたもそれ以上仰しやらないで下さい。』

『さう？』と時子は悲しさうに覺也の顔を見詰めてゐたが、『私は前科者ですからどんなに辯解したつて、お信じ下さらないのも御尤もです、ぢやア何にも申上げますまい。けれども唯一つ申上げて置く事があります、それは私と堅爾さんとは戸籍上夫婦であつても、眞實はマダ結婚して居ない事です。私は戸籍だのいひなづけだのといふ事はホンの形式だと思ひます。本當の結婚ツてのは、おたがひに愛情が生じて、戀が成立してそれから後の事でせう。大變失禮な

申し様でございますが、あなたの頭には約束だとかいひなづけだとかいふ事に非常な權威をお認めになる傳統のお考へがお有りなさるんですワ。堅爾さんは私を愛して居て下さるけど、私には堅爾さんを愛する心がマダちつとも起りませんから夫婦でも何でも無いんです。だから私は結婚後半年になつても、まだ全く他人なのです。私は近き未來に於て堅爾さんと夫婦になつてもいゝといふ約束の證に入籍して置いただけです。そしてどうかして堅爾さんを愛したいと思つて焦つてゐますけれど、私はマダ堅爾さんよりも誰よりも私自身を可愛く思ひます。だから私は堅爾さんに身を委せないのです。私はあなたのやうな物の解つたお方が、須基子さんを愛してあげて下さる事を嬉しく思ひます。だけど須基子さんの方に、本當の愛情が起るまで、あなたは御待ち下さいませんか。ネ、石塚さん。』

時子は眞面目な顔付で涙さへ浮べながら斯う言つて覺也の顔を覗き込んだ。けれども覺也は憤がらろしいやうな面地で、

『何とでも理窟はこじつけられます、たんと氣儘をなさい！ 私は私で行くべき途を行つてみます。左様なら！』

覺也は席を蹴つて室外に出て行つた。時子は追従るやうにして、

「石塚さん、須基子さんに愛の眼覺めの來る日まで……ネ、どうぞ須基子さんの脆弱い心を壓迫しないで置いてあげて下さい。」

「壓迫？ 何を仰しやるのです？ 僕は自由を尊重します。僕は自分の自由を尊ぶと同時に、須基子さんの自由をも尊重します。」

覺也はこめかみの所をビリ／＼と動かしながら二階を駆け降りた。そして直ぐ渡舟にとび乗つた。そして舟が海上を一町ばかりも離れた時、ふと二階の方を振向くと、そこにはやつぱり時子が立つてゐた。

七時前に汽船龍田丸は勝浦港を出た。覺也は船室の中で、赤島温泉での思はざる時子との邂逅を夢では無かつたかとも思つた。不意に時子から投げつけられた會話を片つばしから少しづつ解してみた時、時子の言つた言葉には十分の條理が立つてゐるやうにも思はれた。しかし強

いてかぶりを振つて『どうしたツて須基子さんに會はねばならない！』と心の中で叫んだのであつた。

潮の岬も日の岬も案外靜かに過ぎて、翌日の午後二時前に船は大阪の川口に着いた。

「皆さん、唯今舳舟が参りますから、お仕度を願ひます。」

ボーイは斯う言つて下駄箱から靴や下駄を取り出して揃え初めた。

「ああ、たうとう着いたかなア。」と覺也は直ぐ一時間二時間後の光景を幻に描きながら身仕度をしてゐると、一人のボーイが室内を物色するやうにして、

「勝浦からお乗りになつた石塚覺也さん……石塚さんはどなたでございますか。」と云つた。

「石塚は僕だ。どうしたの？」

「一寸こちらの應接室へお出でを願ひたいのでございます。」

「はア、今すぐ……」と言つてボーイについて行つて見ると、そこには四十恰好の縞の羽織を着た商人風の男が待つてゐた。

「あなたが石塚さんでございますか、別に用は無いのですが、一寸どちらへお出でに

なるのかお尋ね致したいと思ひまして、』

『僕ですか、僕は西ノ宮の附近まで参ります。』

『御訪ね致すお家は御承知なんでしょうか。』

『いえ、どの邊か知りません。』

『左様でございますか、いやどうも失禮致しました。』

男は呻に頭を下げて出て行つた。不思議な事を聞く男だと思つたが、覺也は別に其の姓名も聞かなかつた。

やがて乗客はみんな陸へ上つた。覺也は『梅田まで……』と言つて辻俵を招いた時、さいぜん應接室で會つた男が群集の中からチラと顔を見せたと思ふと直ぐ見えなくなつた。

覺也の俵は石炭滓のやうなドス黒い路を曲りくねつて走つた。前に一挺と後に一挺と三挺の俵は二三間づゝの間隔を置いて走つてゐたが、何かの拍子に覺也がふと後を振向いた時、其の俵にはさつきの縞の羽織が乗つて居るのに氣付いた。

梅田から香櫨園までの切符を買つて電車に乗込んだ時、前後の俵に乗つてゐた二人の男も一

緒に乗込んで来た。二人はひそ／＼と何だか話し合つて居るので、近寄つて名乗りもしなかつた。

電車が香櫨園に停つた時、覺也はあわてゝ『此所だ／＼』と小聲に言ひながら小いかばんを片手に車を出た。そして交番の前を松並木の方へ堤に沿つて歩いてゐると、最前の二人が十四五間後からこそ／＼ついて来た。

覺也は初めて夫れが自分に尾いて来る役目をもつた人達だといふ事に氣付いた時、頭の中がグーン！ と鳴つた。しかし氣をおちつけて五六間後の方へ引返して、ことさら丁寧に、

『一寸お尋ね致します、川尻と申すのは此邊でございませうか。』

『左様でございます、此邊をズツと川尻と申すのでございます。』

縞の羽織は親切に答へた。

『恐れ入りますが、此邊に一月ばかり以前紀州の新宮から引越して来た、太地ツて申す家がございませんでせうか。』

『太地さん？ 太地どなたさんでございますか。』

「太地須基子、或は古座ナオミどちらかでございます。」

「一寸お待ち下さい、直ぐ調べて参りますから、」

男は交番の方へ走つて行つた、紺の三紋付の羽織を着た男は杖で道芝をポツ／＼打きながら覺也から三間ばかり隔つた所に立つてゐた。

「わかりました、すぐそこでございます、御案内致しませう。」

縞の羽織はニコ／＼笑ひながら先に立つて堤を二町ばかり行つて左の方のダラ／＼坂を降りた。そして三人は二町ばかり町の兩側を見ながら歩いたが、須基子の名もナオミの表札も見えなかつた。

「たしか此邊だと聞いたが……」

縞の羽織が四角よちかくの所であちこちと眺めてゐる内に、覺也は向側の大工の家に行つて、

「一寸お尋ね致します、此邊に太地さんてお方は居らつしやいませんでせうか。」と訊いてみた。

「あ、彼の紀州の？」

若い職人は板を削る手を止めて言つた。

「さうです／＼、一ヶ月程前に引移つて来ました……」

「其のお方は丁度此の隣に居ましたが、昨日轉宅なさいました。」

「轉宅？ どちらへ？」

覺也の言葉は餘程あわてゝゐた。勝手の所から前垂で手を拭き／＼出て来たかみさんが、

「太地さんはお三人で東京の方へお引越しになると申されましたが、あなたは石塚さんと申すお方ではございませんでせうか。」と云つた時、覺也は不意を打たれてギクリとした。

「さうです、僕は石塚ですが……」

「さうですか。お手紙を預つてございますので……」

かみさんは机の抽出から一通の手紙を出して来て覺也の前に措いた。覺也は急いで手紙を取上げて其裏を引くり返して見たが、そこには「古座ナオミ」とあつたので、淡い失望を感じながら中を披いて見ると、

御尋ね下さる由時子様よりの電報にて承知仕り候へ共、少々都合これあり本日當地を引拂ひ

申し候ふ。

これより四國に渡り諸所を見物致し候うて東京に参りかねく計畫致し居り候ふ通り須基子様の學校を取定め候ふ上萬事御通知申上ぐべく候間何卒夫れまで暫く御待ち下され度候ふとあつた。覺也はワク／＼と慄えながら其の手紙をポケットに捻ぢ込んで、さて須基子の行先を詳しく尋ねようとしたが、舌が硬張つて物が言へない。

『御免下さい、伊賀君は御宅ですか。』

『どなたでございますか。』言ひながら中から障子を開けて疊の上に手を突いたのは二十一二歳の色の白い平面の娘であつた。

『私は石塚覺也と申します、伊賀君とは學院時代に能く御交際願ひました者です。』

『さやうでございますか、私は伊賀の家内でございます。さ、どうぞお上り下さいまし、今直ぐ歸つて参りますから。』

『では御免下さい。』と言つて坐敷へ上つた覺也は毀れかけた椅子に腰を掛けながら坐敷の有様を隅から隅まで見た。

二軒の長屋を打抜いたらしい十二疊敷の長方形な坐敷の片隅には、洋紙に讃美歌の五十番を書いてピンで貼つてあつた。其前には不細工な高い説教臺があつて上に載せてある金縁のバイブルが一冊異常に輝いてゐる。

疊は茶色になつて其所此所が破れ、汚い鼠色の段通が二枚敷かれてはあるものゝ、それさへ
ここに、穴だらけである。

覺也は連日の苦悶と疲労に頭がボウツとなつてゐた上に、こんな不思議な光景を観たので、
言ひ知れない悲しさが胸に込み上げて來た。

がたり障子が開いたので、びつくりして振返ると、そこには色の蒼白い伊賀が立つて居る。

『やア、珍らしい、石塚君ぢやア無いか。』

『大變御無沙汰しました、ずるぶん久し振だつたネ。』

二人は四年目の邂逅に堅い握手をしたが、

『石塚君、大變血色が悪いよ。』と言つて伊賀はぢつと覺也の顔を見ながら、『何か精神上の
變動があつたんだネ?』

『うん、ずるぶんあつたよ。』

『何だ? 例の一件からだネ?』

『まア、そんな所だネ。』

『去年の秋、君は結婚したツて誰かゝら聞いたと思ふ、音無君からだつたか知ら?』

『實はネ、僕は田原さんの世話で、太地家へ入籍する事になつて居たんだ。所が突然田原さん
は亡くなる、新聞社は潰れる、僕は罰金を仰付かる、いろんなごた／＼があつて、たうとう破
談になつたやうな形サ。』

『ぢや、失戀したといふんだネ。』

『失戀といふ所までは行かないんだが、……實はネ、僕は三週間前に新宮を出たのだ。』

『ふん、新宮を出てどこに居たんだネ。今日まで、』

『かうなんだ、僕の結婚した須基子さんといふ娘が、家庭教師と一緒に西ノ宮に來て居ると知
つたので、僕は急に思ひ立つて音無君にも誰にも知らさないで、下宿を引拂つて來たんだ。そ
してやつと川尻で住所がわかつたかと思ふと一日前に四國の方へ行つたと言ふぢやないか。そ
で、僕はむやみに高松へ行つたのだよ。そして鐵道ホテルに宿つて宿帳を調べてみると、前の
晩に須基子さん達はそこへ宿つてゐるぢやないか。』

『ふん、そこで遭つたのかネ。』

『いや、遭へなかつた。丁度僕の着いた朝、金刀比羅の方へ行つたといふので僕は翌朝の一番列車で琴平町へ行つたんだ。あすこのネ、虎屋といふ宿の番頭に頼んでもよりの宿屋を調べてもらつたら芳橋へ泊つて居るんだらう。で、早速行つて見ると、たつた今の汽車で多度津へ立つたといふぢやないか。僕は早速停車場へ駆け付けたが、僅か三分の違ひで乗後れてしまつた。そして僕は九時半の汽車で多度津へ行つて見ると、丁度愛媛丸が臨時寄航だと言つて、もう乗客がぞろ／＼乗込んで居るのだらう。僕は其の乗客の中に須基子さん達が居るかも知れないと思つて、群集の中を血眼になつて探したが居ない。で、築港の方へ走つて行つて棧橋の上を歩いてゐる乗客を見てゐると、丁度甲板へ登る梯子の下に、須基子さんと其の家庭教師と女中が立つてゐるぢやないか、僕は早速切符を買ひに走つて行つたが、もう満員で賣らないと言ふんだ。折角切符を買つた連中までが次の定期船まで待たねばならないといふ騒ぎで入場口はまるで喧嘩のやうな大混乱だ。僕は仕方が無いから、又築港の所へ走つて行つて甲板を見たが、もう其時須基子さんらしい影も見えないんだ。そのうちにたうとう船は遠慮なく出てしまふといふ始末……』

覺也の眼には涙が泛んでゐた。伊賀は慰めるやうに、

『ふん、それからどうした？』

『僕は仕方がないから、下山通りに居る友人の玉野君の所へ電報を打つたのさ。』

『どんな電報を？』と伊賀は同情といふよりも寧ろフィルムを展開を興するやうに問うた。

『通俗小説か、活動寫眞のやうな話だがまア聞いてくれ給へ。僕は、(タイヂスギゴゴ七ジフネツク ヤド ユキサキタノム)と、かう電報を打つて置いて、十一時十分の汽車で高松へ引返して、そこから七時半に定期船へ乗込んだのさ。そして三時頃に玉野君の所をたゞき起したが、けしからんぢやないか、まだ電報は着いてゐないんだよ。どうしたんだらう？』と思ひながら取敢えず玉野君の所で泊めてもらつて、八時過に朝飯を食べてゐると、妙な男が玉野君を喚び出しに來たんだ。』

『妙な男が？ 何の爲にだらう？』

『玉野君は其男に、僕と玉野君との關係から太地家の事から詳しく訊かれたのだから、玉野君は知つてゐるだけの事は答へたさうだが、何だか氣味が悪いから、僕に早く出て行つて呉れろつて言ふんだらう、殊に玉野君のお袋は(此家は陸軍の恩給を頂戴してゐる家だから、いろんな疑

ひを掛けられて、恩給を頂戴出来なくなつては大變だ。ツて慄え上つてゐるんでせう。僕も久し振りに尋ねて行つた友人から、出て行けと言はれた時は本當につらかつたよ。けれども何様玉野君も教員といふ職で飯を食つてゐるんだし、一身上に不利益な事でもあつてはならないと思つて、十二時前に失敬したのだが、其時マダ僕が高松から打つた電報が着いてゐないんだよ。船脚の遅い汽船よりも十五時間後れてマダ電報が届かないんだもの、日本の文明も科學も僕一人には何の役にも立たないんだよ、君。』

覺也は段々興奮して來た。伊賀は俯向いて机の上を掌で横に撫でながら、

『ふん、どうしたんだらうネ、それは、』と氣の毒さうに言つた。

『電報が着かなかつたから、須基子さん達がどこへ宿つたか全く手懸りは無かつたのだけれど、玉野君が妙な男に會つた時其男が（ミカドホテルに宿つてゐる太地須基子、古座ナオミを知つてゐるか。）ツて訊いたといふので、僕は早速ミカドホテルへ行つて見たのだ。』

『ふん、それから？』と伊賀は好奇心を唆られたやうな調子で問うた。

『所がネ、太地さんには波止場から妙な男が三人も蹠いたんだつて、』

『太地さんにも？ そんな事は無いだらう？』

『いや、本當だ、多分それは僕が多度津から玉野君に打つた電報を調べた結果、須基子さん達を注意したのに相違ない。』

『ちやア、君は須基子さんに逢つたのか。』

『ホテルではネ。かう言つてゐたよ、（何だか見ず知らずの人がついて來るやうで、不安だからと仰しやつて、東京の方へお立ちになりました。）ツて、僕はがっかりしちやつたよ。』

『では、太地家はもう東京へ引越してしまつたのだネ。』

『さうらしいから僕は東京へ行つてずぶん聞合して見たが、ちつとも判らない。』
覺也は兩の手で頭を抱えながら沈鬱な顔付をして机の上をぢつと見てゐた。

『ちやア君、東京でもたうとう會へなかつたのだネ。』

『僕は不快でたまらない事があつたから、少々やけぎみになつて歸つて來た。』

『不快な事とは？』

『僕は大阪の川口へ着いて以來今日まで丁度三十二の恐怖の影に付纏はれたんだ。』

『恐怖の影？ ふん、わかつた、さつき僕がこゝへ歸る時、その四辻の所に二人立つてゐたよ。』

『實に不快だつた、僕はもうやり切れぬ、一體あんな事をしてどうする積りだらう？』
覺也はゴシ／＼と頭を搔いた。

『所が君、太地の娘さんに逢つてどうするつもりなんだい？』

伊賀は勵ますやうな調子で覺也の顔を眺めながら言つた。

『どうもかうも無い、一度本人に逢つてみて、本人が變心してゐるツて言へば僕は僕自身で決すれはいゝんだし、本人が僕に對して愛情を維持してゐると言へば僕は誰がどんな反對をしようが極度の手段を盡すつもりだ。』

『極度の手段？』伊賀は危むやうに問うた。

『さうさ、生命にかけても目的を果すのだ。僕はさうなると手段と方法を選ばなく。』
覺也の眼は血走つて來たが、果てはハラハラと涙を流して俯向いてしまつた。

『わかつた。要するに君は信仰を失つたんだ。』

『さうだ、在來のやうな信仰はもう僕の魂の中に芥子種程も残つてゐない。僕は僕自身の魂を信ずるだけだ。』

『石塚君、僕には能う君の心がわかる。僕にもそんな経験があつた。僕は愛した婦人に全く捨てられたのだつた。しかし君のはマダ捨てられたといふ譯ぢやなし、前途に光がある。危険だ危険だ。君、用心しなけりや今に君は意識の統一を缺く、Black Monk の Kovrin のやうな幻を見ちや行けないよ。黒い影が何百何千出ようとそんなものにおびやかされてはならない。』

石塚君、お互ひは五年前に上野でやつた天幕傳道時代の信仰に立返らう。ネ、石塚君、僕に祈らしてくれ給へ。』

伊賀は覺也の肩に手を懸けて涙を流しながら祈つた。しかし覺也は冷やかに涙ぐんだ眼を睜つてゐた。

『石塚君、君の魂は今つめたくなつて居る。君は熱烈な戀心で須基子さんを慕つてゐると思ふだらうが、夫れは嘘だ。君は今冷酷と猜疑と嫉妬とで總てを見てゐる。太地さんが君を突放し

たと思つて、君は怨んで居るんだ。君に付纏つた黒い恐怖の影までが、君の戀を邪魔すると誤解してゐるんだ。君の話によると、其の縁談といふのは太地の婆アさんと死んだ田原君と君との三人が勝手にきめた話ぢやないか。須基子さんの心にはちつとも觸れて居やしない。間違つてゐるよ君、須基子さんてマダ十六や七で戀も愛もあるものか。子供ぢやアないか、時節を待つんだ時節を……』

伊賀は軽く覺也の肩をたゞきながら言つた。覺也の心でも『時子さんもそんな事を言つたツケ。』と思つた。

『君、社會を愛し給へ社會を。人類を愛し給へ人類を。世の中には君の愛の手を待つてゐるものが澤山々々ある。先づ第一に須基子さんを愛し給へ、本當に愛し給へ憤怒や嫉妬や猜疑を投げ捨て……』

覺也はうなだれて何か考へ込んでゐた。伊賀は優しい聲で勝手の方へ行きながら、

『花子ちゃん！ お茶を持つて来て下さい、花子ちゃん！』と云つた。

『はい。』と答へて十六七の圓顔の娘が土瓶を提げて来て夫れを机の上に置いた時

『おうい、伊賀の馬鹿野郎……何だ？ 耶穌の馬鹿野郎……』と障子の外で呶鳴る者があつた。花子はあわてゝ勝手の方へ逃げて行つた。覺也はびつくりして障子の方を見ると、

『ワハ、ハ、伊賀の馬鹿野郎！』と言ひながら障子を開けて上り込んで來たのは、五十恰好の大きな男で、垢まみれな薄汚ない單衣の胸を左右に開けて、毛むくぢやら臍へそをむき出して疊の上にとつかと胡座あぐらをかいた。

『伊賀の馬鹿野郎、お花をどうする積りだい。さア返せ。今直ぐ返せ。あれはおれの子ぢや、煮て食はうと焼いて食はうと俺の勝手ぢや。』

『おい、吉岡、今日はいくら儲かつた？』

伊賀は途方も無い返事をする、吉岡は急に善人らしい顔付をして、『先生、今日は一圓儲かりましたよ、一圓……』と云つた。

『一圓？ 又た飲んだのだらう？』

『へ、へ、この通り、ちよつぱり引掛けて來ました。』

『困るなア君には……さア吉岡、讚美歌を歌はう、大きな聲で歌ふんだよ。』

十字架にかゝりたる、主エスをあふぎ見よ……そは我が犯したる……

伊賀はベースの太い聲であつたが、吉岡は身體に似合はない美しい丸みのある聲で、しかも正確な節で終まで一緒に歌つた。

『さア、吉岡、お祈りをしてやる、静かにして居るんだよ。』

と言つたきり伊賀は何も言はないで黙つて瞑目してゐた。吉岡も俯向いて眼を閉ぢてゐた。二分三分の後伊賀は極めて小さい聲で、

『天のお父様、此の吉岡を可愛がつてやつて下さい……』と言つて又た黙つてしまつた。

『先生、おらア悪かつた。やつぱりお花をあアやつて先生の所へ御厄介ならしておかう。女郎に賣飛ばすのは可愛さうだからなア。』

吉岡は赭黒い手の甲で涙を拭いた。

『よし／＼、僕が引受けた、さア送つてやるから歸れ！』

伊賀は吉岡を伴れ出した。覺也も物數寄に其の宅へ行つて見たが、二疊敷一室の割長屋には小さい筵むしろのきれが二つ敷いてあるだけで、笠もホヤも無い電氣のコードだけが天井の真中からぶ

ら下つてゐる。

隅の方に何だか黒いものが動いてゐると思つて能く視ると、其所には七八歳の女の兒だか男の兒だかわからない子供が膝頭を抱いて屈んで居た。吉岡は筵の上にあぐらをかきながら、

『おい芳坊、先生だぞ、おじぎをしないか、おじぎを……』と云つた。

芳坊と呼ばれた子供は薄暗い室の隅で、ごそ／＼動いたと思ふと、垢まみれの黒い顔の中から前齒の二本脱けた蝠蝠のやうな口を開けてニヤリと笑つた。覺也はそれを見た時、身の毛がよだつやうに思つた。

『先生、今晚はおらア此の芳坊を抱いて寝るからなア、心配しねえで下さいよ。』

『よし、お金はいくら餘つてるんだい？』

『屋賃を三日分拂つたから、もう十三錢しきア残つてゐない。』

『では其の十錢をよこせ、米を買つて來てやるから。』

『頼みませうか先生、お花に持たせて下さい。』

吉岡は帯に巻付けてゐた十錢銀貨を出して伊賀に渡した。伊賀はそれを受取つて歸る途々こ

んな話をした。

「僕の所に居るお花つて娘は彼の吉岡の娘なんだ。此間から吉岡が女郎に賣るツて言ひ出したんで、僕はいろ／＼意見をしてお花を取敢えず引取つてあるんだが、彼の娘を賣れば四十圓五十圓の金が手に入ると思ふと、もう矢も楯もたまらなくなつて僕の所へあばれに来るんだ。其時僕はいつも彼の男と一緒に讃美歌を歌つてお祈りをしてやるんだ。さうすると四五日はお花を賣らうとする心が起らないんだネ。ところが又たやつて来るんだ。それから君、彼の男は去年の春から三回結婚したんだよ。三回！驚くだらう？最初の女はネ、五十幾つになる乞食だつたが、何かの病氣で布袋のやうに腹が膨れて居たんだ。二月程も同棲してゐるうちに死んだよ。僕は其の女の葬式をしてやつたが、間もなく又たえらい肺病患者を引張り込んで來てネ。彼の芳坊ツては其の女のつれ子なんだ。其の女は三七八の一寸美しい女だつたが四十日程居て死んでしまつたよ。それから又た六十餘りの乞食を引張り込んだが夫れは盲目安かくらやすといふ按摩あんまの、かないで、吉岡と盲目安とが大喧嘩をしてネ。たうとう廿日程前に其の婆アかみさんは盲目安にとり上げられてしまつたんだ。それ以來吉岡は毎日酒ばかり飲んで僕の所へ「お花を女郎に賣ら

う」と言つてあばれに来るんだよ。君、吉岡はもうあれで五十七歳だよ、夫れでもネ、生の慾望といふものは……」

伊賀が斯う言つた時、覺也は生來嘗て見た事無い不思議な世界へ引張つて來られた事を知つた。

「彼の芳坊はもう八歳だが、マダ生れて以來蒲團といふものを着て寝た事がない。此間吉岡が二日も三日もちへ歸つて來ないので、僕の所に伴れて來てやつたが蒲團を出してやつても、それを敷いて長くなつて寝る事を知らないんだ、さつき見たやうに隅の方へ行つて圓く曲げたまつて寝るんだネ。」

「ふん、ふん、」と言ひながら聞いてゐた覺也の眼には伊賀が急に尊く見えて來た。

「石塚君、自然主義だの、デカダンのツて、まだ／＼淺薄だ。人間のドン底に入つて見ると主義だの理想だのツてそんな生優しいものは無いよ。腐肉と微菌と虱と南京蟲と罪惡との巢窟へ入つて、死にかけて人間が死にきれないで、生きたい殖えたいツてうなつてゐる様を見た日にヤア……あゝ／＼何といふ恐ろしいこつたらう？」

伊賀は頭を少し前の方に傾けて憂はしさうな顔をした。

『有難う、僕は新しい世界を見た。君、僕をしばらくこゝへ置いてくれないか。』

『南京蟲に食はれるぞ。』

『そんな事は覺悟の上サ。暫く置いてくれ給へ。』

『腐肉の蠢動を研究し給へ、しかしそこにも人間の靈魂は閃めいてゐるからナ。』

言ひながら伊賀は覺也の方を顧盼いて莞爾と笑つた。

『どうしたツて斯うしたツて、我々は自分自身の力で何ともする事の出来ない大きな力に縛られて引摺られて行くのサ。』

これは貞子が度々田原の口から聞かされた言葉であつた。だから貞子は六月の七日に田原と三輪崎で訣れた時、田原の羽織の下にチラと見た細目は自分の心から描いた幻覺だらうとは思ひながら、夫の行先々でどんな變事が起らうも知れないといふ心配は寢ても覺めても心の片隅から取除く事は出来なかつた。だから九月の十八日に田原が死んだといふ簡単な電報を受取つた時、驚くには驚いたが、何だかそれが飛んでも無い間違ひから起つた誤報であつて、『何だツて、俺が死んだといふ電報が來たツて？ それは面白い！』と云ひながら、ひよツこり入つて來るやうに思はれてならなかつた。

毎日の新聞を注意して見てみると、田原の死因に就いて、いゝ加減な當推量ばかり眞しやかに書立てゝあつた。或新聞には自殺だと書いてあつた。しかし田原は決して〳〵自殺を企てる

やうな性格では無かつた。何とかいふ英國陸軍大將と軍國主義に就いて大激論をした末、其の將軍の指圖で絞殺されたのだとも書いてあつた。けれども家出をしてからの田原にはもう軍國主義だの非戰論だのといふやうな事で、生命がけの議論をするやうな客氣は無かつたらうと思はれた。けれども某新聞には、田原がシンガポールに上陸後間もなく労働者の大ストライキがあつて、其の騒動を鎮靜に來た警官の爲めに誤つて殺されたのだと書いてあつた記事は稍や貞子をうなづかしたのであつた。

ストライキとはどんなストライキだつたか其の記事では明かに知る事が出来ない。けれども其の騒動は餘程シンガポールの官憲を驚かした大事件であつたに相違ない。捕縛されて本國へ送られた中村や根本の殘黨が其の騒動の張本人であつたかも知れない。そこへひよつこり行合した田原が何かの間違ひで警官の爲に殺されたといふ事は決して考へられない事では無かつた。

『さうだ、きつとさうだ、騒動には何の關係もなかつたのだが、流弾に中つて死んだのだ！』
貞子は心の中で獨りきめにかうきめてしまつたが、倅、いよ／＼流弾に中つて死んだのだと

きめてしまふと同時に、急に生前のいろんな事が思ひ出されて、張り詰めてゐた氣も俄かにゆるんで、もう何事も手に付かず、唯毎日毎晩泣明し泣暮すばかりであつた。

さうして、涙の中に悲しい冬は過去つて、新しい一月が來た。しかしお目出度いとも言へなければ、悔み弔ひも言へない田原の家へは誰も來なかつた。淋しい元日を貞子は泣き暮した。

二日の朝音無が氣の毒さうな顔付をしてはひつて來た時、貞子は始めて思ふ存分の事を言つて音無を怨んだ。家出をする前に田原から二度までも其の決心を打明けられながら、何で自分にそれを言つてくれなかつたか。若し其事を言つてくれたなら、よし其の決心は離へず事が出來なくとも、あの事はかう此の事はあつと、ちやんときまりをつけて置くのであつたに……と貞子は始めて駄々をこねるやうに怨み言を並べてみた。

涙に誘はれて居た音無は、思ひ切つたと云ふやうな態度で、

『奥様！ 能く言つて下さいました。僕も田原君から彼の事を打明けられた時、何とかして御引留してみたいとは思ひました。けれどもそれは僕にどうしたツて出來ない事でした。何と言つていゝでせうか、田原君は本當に宇宙の大勢力といふやうなものに、グン／＼と引張つて行

かれました。強い／＼力に縛られて行くのでしたから、私はもう断念して居ました。しかし奥様、あなたはマダあの鳴野君の事は御承知ないのでせう。』

『知りません、鳴野様がどうなさいましたの？』

『暮の二十四日に豫審が決定になつて、重罪公判に廻されました。高明寺の高尾君も一緒に。』

『まア、どんな罪名で……』

『僕の友人が鳴野君の辯護をしてくれてゐたのだが、今朝其の辯護士から詳しい手紙が着きました。私は其の手紙を読んで本當に驚いたのです。奥さん……』と音無は聲をひそめて、『あの製材會社の放火は其の犯人が鳴野君だといふ事に決定されました。そして光明寺の高尾君も共犯者として……』

『まア、いよ／＼そんな事になつたのでございますか。だつて私はどうしてもそれを信ずる事は出来ませんワ。』

貞子は賢しさに眼をみはつた。

『僕もさう思ひます、しかし豫審の結果は遂に有罪と認められたのです。光明寺の高尾君は最

初から知らぬ存ぜぬの一點張りで押通してはゐるが、家宅捜査の結果佛壇の下からダイナマイトを包んだ風呂敷包を發見されたのだから、どうしても言逃れやうが無い。そのダイナマイトは鳴野君が光明寺に下宿してゐた頃、熊野川で鮎を捕る爲に鑛山の坑夫から内證で買つて、それを風呂敷包みに入れて光明寺の佛壇の下の戸棚へ置いてあつたのださうな。それは鳴野君が、正直に申立てゝゐるといふ話だが、こゝに一つの不思議は、鳴野君の申立はダイナマイト七本だといふのに、家宅捜査の際發見されたのは五本しか無かつたことです。とすれば、其中の二本を誰かに盗まれたに相違ない。それから鳴野君の労働服——あの法被はつぽと江戸腹掛と紺の股引——が彼の火事の晩に誰かに盗まれたと云ふ申立なんです。だから辯護士は其のダイナマイトを賣つた坑夫と、其の法被や股引を盗んだ男とを早く嚴探してくれるやうにと其筋へ掛合つて居るんださうです。ストライキを企てた連中の誰か、鳴野君の法被を着て其のダイナマイトを二つ盗んで、或は無謀な事をやつたのかも知れません。で、警察が鳴野君の申立に信を置いて其の法被の行方を嚴重に調べてくれたなら、或は鳴野君も高尾君も無罪になるかも知れないんだが……しかし困つた事には……』と音無は左の掌で頬べたを撫でながら腫を疊の上に落した。

「困つた事？ それはどんな事でございますか。」

「辯護士も非常に困つてゐる事が二つあるのです。其の一つは鳴野君の家宅を捜査した結果、田原君から、ダイナマイトの事に就いて手紙を送つてあつた事です。それから今一つは田原さんの始終取引なすつた薬種店から爆発物の原料を、田原さんのお名前で買った男があるので。だから辯護士も言ふのです。鳴野君の申立は徹頭徹尾一貫してゐるから、決して彼の放火犯人では無いことは信じられる。しかし田原さんから爆発薬の事を教へてもらつた事實があり、薬屋から其の薬を田原さんの名前で買った男が萬一鳴野君であつたとするなら、他に有力な反證が上らない限り如何ともする事が出来ないとかう言ふのです。」

「まア、そんな事をたくは鳴野さんに教へたんでせうか。」

貞子は疑ふやうな眼付で音無の顔をデロリと見た。

「僕は其の事實の真相は知りません。しかし現に其の證據が押收せられてゐるならどうする事も出来ません。そこで僕は奥さんに申したい事があるのです。」

音無は何か大事件でも話し出すやうにゐすまひを直した。

「どんな事でございますか？」

貞子も眼を見つけた。

「そりやア奥様は諦め言葉だと仰しやるかも知りませんが、私はかう云ふ事を申し上げたいのです。田原さんがたとひあの時家出を思ひ止りなすつたとしても、やっぱり今度の鳴野さん達の懸疑事件で大變な御迷惑をお受けになるのです。それはどうしたつて逃れられない事です。だから家出をなすつてあアいふ運命に陥りなすつたのも、家に居なすつて、飛んでもない懸疑でかれこれ言はれるのも結局は同じ事です。大變残酷で無情な話だと御考へなさるかも知れませんが、私は寧ろ田原さんが、あアして自分の思ふ通りの行動を執られた結果不慮の死を招きなすつた方が、お宅に居られて、下らない放火事件といふやうな事で憂目を見られるより、すつと御満足だつたらうと思はれます。これは決して通り一遍の諦め話ではありません。奥様、私自身では田原君の亡くなられた事に對して斯んなに考へてゐるのです。それから……」と言ひさして貞子の顔を見たが、貞子の眼には涙が一杯浮んでゐた。音無は少し顫へを帯びた聲で、

「あんまりひどい言葉だと仰しやるかも知れませんが、奥様は田原君の亡くなられた事に對し

てさう諦めてもらひたい。それからあの庄平——田原の實兄——さんの事をお考へ下さい、あの方は可愛い幼子を三人まで残して夫婦一時に名古屋で地震の爲に死んだぢやありませんか、哲子さんも丈太郎さんも俄かに父親に亡くなられたのはふびんです。それは同情致しますが、彼の庄平さん夫婦の遺児であるエノクさんやピリポさんに比較して見ると哲子さんも丈太郎さんもあなたといふ母親だけ残つてゐるぢやありませんか。で、奥様、僕に今一步進んで言はして下さい。いよ／＼田原君の亡くなつた事が決定した以上、直ぐ起る問題はあなた方残る三人の問題です。田原君は僕に斯う申しました。親類中はみんな一風變つた人達ばかりなので、「なアに彼りやア自分勝手に外國へ行つたのぢやないか。」と云つて後の事は誰も手出しをしないかも知れないが、それは決して怨むべき事ではない。人にはめい／＼に擔つて行かねはならない運命があるんだから……と申されました。で、奥様、思ひ切つて言はして下さい。此の後始末を親類中が相談の結果、哲子さんは誰の所で丈太郎さんは誰の所でといふやうに、二人を一人々々親類に引受けて育てる事になつた結果、あなたの姓が田原で無くなり、元の鳥出の姓を名乗らなければならなくなつたところで……それはそんな事はあらう筈はありませんが……よし、さ

うなつた所で、あなたは二人の生立ちを蔭ながらも見て居る事が出来ます。哲子さんも丈太郎さんも、産みの母が生きてゐるのだといふ希望を持つ事が出来ます。エノクさんやピリポさんたちは其點に於て本當に可愛さうです。しかしあんなに幸福に成長して行くぢやありませんか。物は取りやうです。夫婦共一時に煉瓦に打たれて死んだ庄平さん達の事を考へてお諦めなさるより外はありません。僕の申上げた事がお氣に障りましたら御免下さいまし、しかし僕はさう思ふので、そんなに極端までのお覺悟をもたれる必要が確かにあると信じますから、思ひ切つてかう申上げたのです。』

音無は言終つてほつと太息をついた。貞子は左の指先で鬢のほつれ毛をいぢりながら俯向いて居たが、涙は引切りなく憂ひに瘦れた兩の頬を傳つて流れた。

一月の廿四日に田原の遺骨は小さい四角な箱に收められたまゝ送り届けられた。

音無はさぞ打濕つた涙の中に親戚一同が悲嘆に暮れて居ることだらうと思ひながら、二時頃

に田原家へ行つて見ると、どうしたものか騒動でもあつた後のやうに、一家の中には非常に喧騒な空氣が漂うてゐた。

『そんな馬鹿な事があるものか、我々が折角船まで行つて迎へて來た遺骨を、屋根の上にも天井にでもほり上げて置けとは何事だ！』

色の淺黒い額の長い男は火鉢の縁を煙管の雁首で殴りながら言つた。

『それは君が意味を取違へたのだ、兄きはそんな意味で言つたのぢや無い。』と言ひながら縁側の所から出て來たのは東家エノクの弟ビリポであつた。

『しかしさう言つたぢやないか、現に……』

憤怒に燃えた眼でビリポを睨みながら言つたのはビリポの従兄に當る治であつた。

『言つた、確かに兄きは言つた。しかし兄きの考へでは遺骨といふ物は必ずしも棺に入れて墓へ葬らねばならないといふ規則も何も無いのだから、屋根の上に置かうと天井に置かうと差支へはないと言つたのだ。つまりそんな形式から自由になるのが死んだ叔父さんの遺志だと言つたのサ。』

『では葬式をしないでもいゝと言ふのかい。さう言へば……』

側から一人の男がくちだしをした。ビリポは少し笑ひ顔で、

『さうだよ、葬式といふやうな事は、してもよし、しないでいいんだ。叔父さんが現にこゝに死んでゐるのなら、そりやア其の屍體を焼くなり埋むなり何とか處分をしなきゃならないが、こんな一握りの灰になつて歸つて來た以上、此の灰は此のまま何十年床の間に置いて、箆笥の中へしまつて置いて、差支へないんだ。だから兄きは君達のやうに葬式々々ツて騒ぐのに反對するんだらう？』

『そんな亂暴な、まるで破壊な事を云ふ……』

治は腹立たしさを眼でビリポを睨んだ。

『何だい、マダ愚圖々々言つてるんか。』

大聲で言ひながらそこへ入つて來たのは東家のエノクであつた。

『どうしても治さんは棺箱と輿とをこしらへて、それを擔いで行列を組まうと云ふんだ。』
ビリポはエノクの方を眺めながら言つた。

「輿を？ そんな形式的な事はよせ〜。」

『だってもう大工が来て居るんだぜ、兄さん。』

『もう棺を造つてゐるのか。』

エノクは鉤の音する裏の方へ走つて行つた。それと見て治も後を追うた。

最前から口々の議論を黙つて聞いてゐた、中野といふ貞子の姉は、事容易ならずと見て取つたか、あわてゝ裏の方へ駆けて行つた。

音無は硝子越しに裏口の方を見てゐたが、何だか大聲で二言三言争ふやうな聲が聞えたきり、ピタと人の聲も鉤の音も聞えなくなつた。そして中野とエノクと治とは黙つて坐敷へ戻つて來た。

『私は双方に理解があります。』と中野はエノクと治の顔を見較べながら、『エノクさんはつまり亡くなられた田原さんの意志を尊重しようと思つて仰しやるのです。成程田原さんは私共にも度々さう仰しやいました。自分が死んだら葬式といふ事をしてくれるなつて、あの晩雅樓で亡くなつた太地の利雄さんを大變賞めて居られたのでした。だから全然葬式をよさうと思つて仰しやるエ

ノクさんの御心は私に能く理解出來ます。しかし治さんの仰しやる事も道理です。亡くなられた叔父さんの遺骨を成るだけ鄭重に、そして立派な葬式になさうと思つて仰しやるのは、それも最も至極な御考へです。で、私に其中間の説を立てさせて下さい。エノクさんの仰しやる通り、棺箱だとか輿だとかいふ事はよして、そして明早朝葬式だけを鄭重に致しませう。サ、さうして兩方の説を折衷致しませう。』

中野が双方を斯う調和した時、エノクは直ぐ、『それはさうしても善いでせう。』と言つた。治も遂に其の折衷説に賛成した。

葬式の相談だけにでもあれだけの争論があるとするなら、此後彼の一家の後始末に就いてはどんな口論が起るかも知れないなどと思ひながら田原家を出た音無は、翌朝疾く其の葬式へ立合つた。

一家親族の主立つた人々が二十人ばかり、もう座敷に圓座を作つてゐた。東京に居るのだと

いふ田原の唯一人の姉である美知代といふのも来てゐた。昨日罵り合つて喧嘩したエノクも治も今朝はもう仲の善い従兄同志として、いろんな事に斡旋してゐた。

三人兄弟が二人まで變死して、唯一人生残つてゐる盛久といふ田原の兄が、死生觀といふやうな事を簡単に語つた。其の話の要點は（木の葉が一枚散るのも、獸が一疋死ぬのも、人間が一人死ぬのも、みんなそれは神の定めた法則に遵ふのだから、其の死にさまがどうであらうがかうであらうが決して悲しんではならない）と云ふのであつた。

音無も簡単な弔文を読んだ。そして治とエノクとピリボとは途中代り／＼に遺骨を納めた小さい箱を提げて南谷といふ墓地まで行つた。一行が小山の麓まで行つた時に、右手の茅原がポソ／＼と動いたと思ふと、其所から大きな一疋の犬が飛び出して来て、いきなり貞子に跳び縫りなから頻りに吠えた。

『まア、ブラウ？』と言つた貞子は顔色を變じて裾模様の汚れるのも氣にせず犬の頭を撫で、やつた。ブラウは田原が家を出る時、貞子の俵の後について三輪崎まで走つて行つたきり、其後どこへ行つたやら、ちツとも姿を見せなかつたのであつた。

『お前は彼の日から今までどこに居たんだ？ え？ 何所から歸つて来た？』と言ひながらハラ／＼と涙をこぼした。若し傍に人が居なかつたなら、（お前はきつと主人の行方と其の最後を見て來たに相違ない。サ、詳しく話しておくれ）と言つて其の首を抱いて泣いたに違ひない。やがて一行は山の上に登つた。二坪ばかりの小さい墓場には地震の爲に變死した庄平夫婦の墓石があつて、其の右手に小さい穴が掘られてあつた。人夫は治の手から遺骨の箱を受取つてそれを埋めた上に二尺ばかりの小さい木標を建てた。

田原清一之墓といふ文字を書いた木標が貞子の眼の前に白くはつきり見えた時、去年の九月以來、疑問のうちに過して來た田原の死といふ事が、始めて判然と意識された。

『たうとう亡くなられたのだ！』

さう思つた時、貞子はグラ／＼と眼がまふやうに感じて、傍に立つて居た従妹のお絹の肩によろ／＼とよろけかゝつた。

貞子は初めてハッキリと夫に死訣れたと思ふと、其の墓標の前に跪いて両手を合せてそれを拜みたかつた。しかし三尺ばかり小高い所に立つてゐた義兄の盛久が『拜むのぢやないよ。』

と言つたので、餘儀なく墓標を見詰めたまゝ立つて居ると、音無はビリポの持つてゐた小さい花環を貞子に渡して、『これを彼の墓標におかけなさい。』と言つた。

貞子は音無の言葉を聞いた時、救はれたやうな嬉しさを感じながら、其の花環を掛ける爲に一步墓標に近づいた。貞子は産れて初めての言ひ知れない恐ろしいとも悲しいともわからない感情で其の花環を墓標にかけながら、『あなたは亡くなつたのですネ。』と心の中で靜かに言つて熱い／＼涙をぼと／＼と土の上に落した。お絹はもうたまらなくなつて聲を立てゝ泣出した。音無もハンケチを眼に押當てゝ俯向いてしまつた。

ザワ／＼と薄の枯葉が動いたので、一同がびつくりして横手の方を見た時、二十前後の青年が盛んに煙の立登る一束の線香を手にして枯草の中から出て來た。

『誰だらう?』と思つてゐるうちに、青年は其の墓標の前に線香の一束を供へて『先生!』と喉の張裂けるやうな聲で一口叫んだまゝ土へ食ひ付くやうにしてうなだれてゐたが、やがて起上ると同時に狂人のやうに草原を下の方へドン／＼と走つて行つた。しかし一同の中に其青年を見知つた人は一人もなかつた。

『さア歸らう!』と言つたのは盛久であつた。一同は残り惜しいといふよりも寧ろ物足りないと思ふ感じで、見返り／＼墓地を離れて山を降りた。山の中ではブラウが頻りにワン／＼と啼いてゐた。

音無が伊賀に見送られて三ノ宮驛から新橋行の汽車に乗込んだのは午後の九時であつた。

『石塚君に會ひたかつたのだが残念だつた。君から宜しく言つて下さい。』

音無は窓から首を突出しながら言つた。

『あの聖書會社の社長は、なか／＼太ッ腹だから大丈夫だよ。石塚君の方は僕が引受けて置くから、君は上京して太地家の行方を調べ出して彼の結末をつけてやつてくれ給へ。』

『何とかして調べて見よう。そして君まで手紙を出すか或は歸りに立寄つて詳しく話すか、どつちかにする。』

言つて居る時、インバネスを着た三十五六歳の色の白い男が音無と伊賀との會話してゐるのをチラと眺めながら列車の中に入つて來た。

『來たぞ！』と伊賀は小聲で言つた。音無は『うん、』とうなづいたが、其の途端に相圖の笛がピーイと鳴つて汽車は靜かに動き出した。

『さやうなら！』と言つて音無の手を確と握つた伊賀は、『音無君、短氣を起さないでネ。』

『安心し給へ、海千山千の僕だから。』

『さやうなら。』

伊賀はちつと汽車を見送つてゐたが、汽車が構内を出てしまつた頃、窓から首を引込めて座席に腰を卸しながら、さいぜんの男を見ると、男は一間ばかり向ふの方で頻りに赤新聞を讀んでゐた。音無は此の男がどこまで行くのか、そして交替の時、どんな合圖をするのかそれを知りたいものだと思つた。

九時四十六分に汽車は大阪驛へ入つた。すると其男はマダ汽車の動いてゐる内に、窓の中から首を突出して、プラットホームの方を見てゐたが、汽車の停つた時、右の手にハンカチーフを握つてそれを一寸差出した。すると群集から二三間離れて立つてゐた洋服姿の男が同じく白のハンカチーフを一寸振つた。そしてインバネスが汽車を出て洋服に小さい手帳のやうなものをそつと手渡したが、洋服はキョロ／＼とあたりを見廻しながら入つて來て音無の右隣りへ腰を掛けた。

『御苦勞様ですネ。』と音無が笑ひながら聲をかけると、『やア、どうぞ悪からず。』と洋服は一寸帽子に右の手をかけて會釋した。京都驛でも大津驛でも同じ方法で交替したが彦根へ着いた時、大津から来た和服の男は頻りに窓の外を眺めてゐても、一向交替らしい男が來なかつた。ぶつ／＼と口の中で何だか呟いてゐたが、汽車を出て窓の外で頻りに改札口の方を眺めてゐると、向ふから色の白い若い男が息せき駆けて來て、

『終列車だツて電話が掛つたもんだから、主任は居ず大まごつきサ。』

言ひながら長いマントの前を一寸開けて、金ぼたんを見せてハ、と軽く笑つた。

『馬鹿な、終列車はこゝへ停車しないぢやないか。』

『ねエ、主任は少しボンヤリだから。』

マントは急いで列車に入つて來て、音無の前に腰を掛けた。餘程あわてゝ駆付けたと見え、頻りに額の汗を拭いてゐる。

汽車が十分ばかりも闇を縫つて走つたと思ふころ、音無はポケットから名刺を出してそれをマントの前にそつと差出しながら、『どうも御苦勞さまですなア。』と言つた。マントはあわ

て、烏打帽を一寸脱ぐ眞似をしながら『はあ、どうも……』と言つて其の名刺を受取つた。

『どうも御苦勞さまですナ。』と音無は同じ挨拶を繰返した。

『いゝや、あなたこそ御迷惑でせうが、どうぞ悪からず……』

『掏摸の用心になつて安心ですよ。』

『併しお察し申します、御迷惑の點は……』

『それは實のところ、あんまり嬉しいものぢやアありませんが、あなた方だツて愉快ぢやア無からうと思ひます。』

『條令では、私共はかうしてあなたがたに近寄つてはいけません。あなた方の御自由を束縛してはならないんですから。』

『君はかうして我々について來るのが専門ですか。』

『いゝえ私は専門ぢやありません。だからへまな事をやりましたネ、時々……』

『へまな事？ どんな事をなさいましたのです？』

『二月程前でした、私は餘りお氣の毒だと思つて、同情し過ぎた結果、見失ひましてネ、月給

百分の二十をフイにしましたよ。』

『僕は逃げも隠れもしないから安心し給へ。』

『ありがたう。まア可愛がつて下さい、爵俸を食へば年末賞與が無く、お負けに昇級が遅れると来るんだから。』

『どんな種類の人達にさうやつてついて行くのですか。』

『さうですナ、純粹の發狂人、直奏狂、顯官に漫りに面會を求めめる者、それから近頃は敬神狂といふのが時々あります。これは一番始末に終へない連中で、何かと云へば神國々々言つて途方もない事を仕出かしますからナ……』

『では僕はどの統系に屬するんだらう？ やつぱり敬神狂の方でせうか。』

二人は聲を揃へてハ、と笑つた。

『失禮します、もう直きですから、』と言つてマントは昇降口の所へ出て行つた。

米原で入つて來た男は頭の少し禿げた四十男で、長い舊式の羽織の紐をいぢりながら、

『あなたですか。どうした事です？』と笑ひながら言ふので、或は其男が知人ででもあるのか

と思つてちつと其の顔を見てゐると、

『お顔を見ると直ぐついて行く必要があるか無いかわかりますよ。』と云つて煙草を吹かし初めた。

『顔で區別出来るのですか其の人の思想が……』

音無は笑ひながら問うた。

『さうですよ。尾行の必要があるお方の顔は大抵悲觀してゐます。あなたのやうに圓滿な人相のお方はそんな必要はありません。』

『では僕の思想も顔のやうに圓滿だと仰しやるんですネ。』

『さうです、私共は人相を観ると直ぐ其人のお心の底まで解ります。』

二人はいろんな話を三十分も續けたが、其うちに音無は睡くなつて、窓へ頭をもたせたまゝうつ／＼と眠つてしまつた。

名古屋々々々！ と呼ぶ聲に眼を覺した時、もう其男は前の腰掛に居なかつた。それから豊橋、濱松、静岡、沼津の各驛で交替に入つて來た男には、別に話かけもしなかつた。

翌日午前十時十分に汽車は國府津驛へ入つた。音無は窓から首を出して交替の男を見てゐると、大島總の羽織を着た丈の高い顔の細長い男であつた。

「あなたが音無信次君ですか、打解けて話しながら参りませう、私は名刺を差上げたいのですが、差上げるわけには参りませんから、一寸御覽下さいませ。」と云つて細長い名刺を音無の眼の前に差出して直ぐそれを引込めた。名刺には海崎種次郎と書いて其の右に長々しい肩書があつた。

二人は打解けていろ／＼話して居るうちに海崎は音無の顔を覗きながら、

「どうせあなたは私の近くにお宿りでせうから……」と意味ありげに言つた。

「あなたのお近く？ あなたはどちらにお住ひですか。」

「僕は芝の今里町です、もうあすここに四年ばかり住つてゐます。」

「さうですか、僕は麴町の方に行きます。」

「麴町へ？ あの太地さんの所へお泊りぢやないんですか。」

音無は不意打に太地といふ言葉を聞いたのでギクリ！ とした。そして慄えた聲で、

「太地？ あの太地お常さんですか。」と問うた。

それ見よ、隠したツて駄目だと言はぬばかりに海崎は得意らしく、「あすこへ行らッしやるんでせう？ あの猿町の太地さんへ。」と言つた時、音無は圖らずも太地の住居が知れたので、胸の動悸を静めながら、出来るだけ落着を見せつゝ問ひかけた。

「太地さんは猿町のどの邊に居られますか。」

「四十八番地で、共榮女學校の裏手です。」

「さうですか、大伴さんも御一緒に居られますか。」

「大伴時子さんですか。あの方は一人で臺町の方に居られます。」

「別居して居るのですか。彼の時子さんは……」

「さうです。太地さんの所は家庭教師と娘さんと三人暮しです。」

「堅爾君は京都の方に居られるのでせうか。」

「堅爾君？ 時子さんの旦那さんでせう？」

「えエ、さうです。今どこに居られます？」

「彼の方はとつくに亡くなられましたよ。」

「え？ あの太伴堅爾君が亡くなられました？」

「それはもう半年も前の事です。あなたはマダ御存知無いですか。」

「知りません、ちつとも知りません。それは驚いた。どんな病気で亡くなられました？」

「どんな病氣ツてするぶん悲惨でしたよ。」

「悲惨？ どうしたのですか。」

音無は根掘り葉掘り問うたが、海崎はたうとうはつきり言はなかつた。

二人は横濱驛で下車した。改札口を出た時音無は海崎をふりむきながら、

「君、僕はお願ひしたい事があるんだ。實はネ、君もかねて聞いてゐられるでせうが、あの太地家が東京へ移轉する一原因になつた田原清一君の未亡人——其の未亡人が今度どこかの神學校へ入學したいと云ふので、僕は實の所其の用件で上京したんだが、」

「はあ、さうですか、それは大變結構な事でございますネ。」

「最初神戸の方の神學校へ入學する手筈になつてゐたのだが、僕が交渉中に君達のやうな方が

訪問したので、學校では急におぢけづいて謝絶されてしまつたのです。だから横濱へ行つても僕の交渉が済むまで訪問しないやうに君から先方へ話して下さるわけには行かないでせうか。」

「宜しい、宜しい、僕は程よく言つて置きます。其の學校ツてのはどこですか。」

「山手通りの二百九番地です。」

「では本牧行へ乗つて行けばいいのですから、そこまでお伴致しませう。」

二人は本牧行の電車へ乗つたが、小さいトンネルを通り抜けた所で下車して坂路を左の方に登つた。坂の登り口に二階建の小さい家があつて、其の表に『秘密探偵社』といふ四角な金文字の看板が懸つて居るのを見た時音無は蝙蝠傘で一才其の看板を指しながら海崎の顔を見てつめたく笑つた。海崎は頭を掻きながら、

「違ひますよ、僕達はあアしてお金を儲けるんぢやありませんから……」

「失敬々々、僕はそんな意味で言つたのぢやありません。」

二人は張の無い聲で笑つた。やがて坂を登り詰めて右へ左へ曲りながら二百九番を訪ねあて

た時、海崎は、

『ぢやア失敬致します。又東京でお目に懸りますから……』と言って門の所から引返した。

音無が立關へ行つてベルを押すと、そこへ出て来た女學生は、びつくりしたやうに、

『まア音無先生ぢやアありませんか。』と云つてツカ／＼と側近く進んで来た。

『北井さんですか……さう／＼あなたは此の學校に居らツしやるんですネ。』

『す、ネ、は驚くぢやアありませんか、私、もうこゝに二年もゐますのよ。』

『夫れはいい、實はネ僕は彼の田原の妻君をこゝへ入學させてもらはうと思つて。』

『田原の奥さんが？ さう……』と言つたが思ひ出したやうに、『まアどうぞお上り下さいまし、今舎監の方をお呼び致しますから……』

音無は應接室に導かれた。北井は裏の方へトン／＼と廊下傳ひに走つて行つたが、やがて小柄な顔のまん圓い四十恰好の女が入つて来て、丁寧に挨拶をした。

音無は手短かに貞子の略歴と希望とを陳べて校長への紹介を頼んだ。

舎監が出て行つて間もなく廊下に靴の音が聞えて、少しあから顔の胸の張つた三十五六とも

見える金髪の婦人がドアを押して入つて来た。

『まア、音無さん？ 私、フラワアです。山田に居らツしやるミス・ライカからあなたと田原の奥さんとがこちらへ行くかも知れないからツて詳しい紹介狀が參つてゐます。』

『さうですか、それはどうも……』

音無は感謝の念が心の底から湧上つて来た。夫れは神戸の學校へ入學の手筈が喰違つて當惑してゐる時、不圖ミス・ライカに出會つて其理由を話したのだが、其時ライカは横濱にかういふ學校があるといふ話をしてくれただけで、別に紹介狀を書いてあげるとも何とも言はなかつたが、そんな親切な先廻りをしてくれてあつたのかと思つた時、本當に嬉しかつた。

『いつこちらへ？』とフラワアは溢るゝやうな愛嬌を顔に湛えながら言つた。

『十一時二十分の汽車で……』

『さう？ 田原さんも御一緒に？』

『子供も二人ありますし、兎に角入學を許可されるかどうか御伺ひ致しました上で電報を打つつもりでございます。』

「否エ、其の御心配いりません。ミス・ライカの御手紙ですつかり私、事情を知つてゐます。可愛さうネ本當に、私共はそんな境遇に居なさるお方を保護させよう。二人の子供さんは信者のお方が預つて下さいます。奥さんは寄宿舎へ入つて一生懸命に御勉強なさるがよろしいでせう。私、もうちやアんと心の中でお部屋まで用意してあります。」

音無は重荷を卸したやうにほつと安堵の思ひをした。

「では入學を許可していただけますか。」

「えい、宜しいとも、お子さん達の事も私、何とかきつとお世話致しますから。」

「どうも有難うございました。」

音無は心から嬉しさに頭を下げた時、ドアをノックする者があつた。

「どなた。」とミス・フラワアは聲をかけた。

「北井です、お差支ありませんですか。」

「北井さん、どうぞお入りなさい。」

ドアを開いて北井はニコ／＼笑ひながら入つて來た。

「北井さん、音無さんはお國の方ネ。あなた田原の奥さん御承知？」

「えい、能うく存じてゐます。」

「近い中にこゝへ來ます、嬉しいでせう？」

「いよ／＼來られますか、本當に嬉しいですワ。」

話して居る所へ小使が來て、けいんな顔付で音無を覗き込みながら、

「此のお方が音無さんにお目に懸りたいと申して表にお待ちですが、こゝへお通し申させようか……」と言つた。音無は其の名刺を見た時、今までの安心も希望もどつかへ飛散つてしまつて、むら／＼と腹立たしくなつた。

「いや、僕が出て行つてお目にかゝります……」

音無は校長と北井とに、貞子が上京したなら直ぐ同伴する事を約束して、二人の子供の事を呉々頼んで置いて玄關へ出た。ミス・フラワアも北井もそこまで送り出して來た。

「左様なら！」と挨拶して芝生の所まで來ると、そこには自轉車を片手で押へながら、玄關の方を眺めつゝ音無の出て來るのを待構へて居た二十七八の洋服姿の男が立つてゐる。

『あなたが音無さんですか。』

『さうです。何か御用事ですか。』

『二十二日に鳥羽から汽車にお乗りなさいましたですか。』

『いゝえ、僕は神戸から来たのです。そんな事を訊いてどうするんです?』

『田原のお名前は何と申しますか。』

『貞子といふんです。』

『お年齢は?』

『そんな事はどうでもいいぢやないか君、此校へ入学してから直接に訊けばわかりますよ。マダ入学もしない前から、さうほじくられちゃア困る。神戸でも其の手で閉口したんだから…』

『いや失禮しました、ではお出でになつてからお伺ひ致しませう。』

男は自轉車を推して外へ出て行つた。最前から此の有様を見てゐたミス・フラワアは心配らしく駈寄つて来て、

『Detective?』と言つた。

音無は Yes と言つて Yes と言つて Yes と言つて一寸途迷うてゐた。

音無は歸り途に、横濱驛から貞子宛に、『ニウガクデキル三ニッツレテスグタテ』と電報を打つて置いて、プラットホームへ行つて電車を待つてゐると、

『大層お早うございましたネ。』と言つて後から聲を掛ける者があるので、びつくりして振り返つて見るとそこには海崎がニタ／＼と笑ひながら立つてゐた。

音無は富士見町の淀野家へ行つて玄關のベルを靜かに押して取次の出て来るのを待つてゐると、障子がサラリと開いたと思ふと、

「おや！ まア音無さんぢやありませんか。」と言つたのは葉出な明るい縞柄のお召に、紫縮緬の羽織を着た夏子であつた。

「やア、奥さま突然お伺ひ致しまして……どこかへお出かけぢやア有りませんか。」

「いゝえ、今日は丁度約束の物を一つ書き上げたので、今までお客様といろんなお話を致してゐたのでございます。」と言つて夏子は音無の顔を眺めながら、「今、もう音無さんのお出でる頃だらう？ ツて、宅と話してゐた所でございました。さ、どうぞお上り下さいまし。」

「どうしてそんな事を？……」

「そんな豫感がありましたので……」

夏子がつこり笑つて居る時、中廊下の所から若々しい顔を出した淀野は、

「やア、音無君、能くいらつしやいました。今も家内と君の事を言つてゐた所だつた。さ、ヒリ給へ。」と言ひながら、玄關へ出て来て、「君も偉くなつたもんだ、今朝から三度もマダ着かないか、マダ見えないかツて天からお調べがあつたよ。」

「あ、さうですか、讀めました。讀めました。今も其のお使ひに送られてこゝまで來たのです。」

「御迷惑でせうネ、すゐぶん……」

「いゝえ、不案内の所へ行くには却つて便利です。」

言ひながら音無は淀野に案内されて二階座敷へ上つて行つた。程なく夏子も入つて來て三人はテーブルを圍んだが、淀野はすっかり心の戸を開いたといふやうな顔付で、

「時に今度は何の御用で御上京なすつたのですか、牧師の會合でも……」

「いゝえ、例の田原君の一家の事で……」

「田原さんはシンガポールで本當にお氣の毒な事でしたワネ、そして其の後をどうなさるのでございますか。」

夏子は同情深い眼で音無を見ながら問うた。

『今度、未亡人^{おくさん}が傳道學校へ入學する事に決心なすつたので、其の掛合に來たのです。』

『尼さんになるのですか。』と淀野は少し驚いたやうに言った。

『さうです、暫く浮世を逃れて専心宗教を研究して見たいと申すのです。』

『どうして又たそんな事を思ひ立つたのですか。』

夏子は心配さうに問うた。淀野も『ネエ?』と言つて夏子に調子を合せた。

『田原君の亡くなつた後で、いろんなガタ／＼があつて、貞子さんもつく／＼故郷が嫌になられたのでせう。』

『御親類に東家さんといふやうな富豪があるぢやありませんか。』

『さうです。だから田原君の残してあつた幾許の貯金を東家君に供託して、月々夫れで三人が食べて行かれるだけのものを利子してもらふ事にしたのです。』

『さうですか、それならまア御結構でございますワネ。學校は何年で卒業でございますか。』

『三年です。そしたら獨立していはゆるバイブルウーマンになるのです。』

『バイブルウーマンツて、どれ程の俸給で儲はれるものでございますか?』

『まア精々十二三圓ですネ。』

『たつたそれツばかり? 本當ですか。』

夏子は驚いたやうに眼を圓くした。

『さうですよ、日本の牧師給が平均二十四五圓ですからネ。今から七年前に海老名彈正君が本郷教會で四十圓、植村正久君が番町教會でたつた二十五圓だつたのですよ。』

『牧師ツてそんなに薄給なものですか。』淀野は呆れたやうに傍から口を出した。

『さうですよ、僕なんか一ヶ月に日曜學校だとか祈禱會だとか云つて平均二十回の集會をするが、俸給二十五圓だ。しかし一回の集會に對して一圓廿五錢の謝儀を呉れるといふ事は本當に感謝すべき事ですよ。まア考へても御覽、一體日本の習慣といふものは、^{びんせん}鑿錢一文を神佛の前に投げて天下泰平五穀成就家内安全息災延命を祈つてゐるんですもの。』

『兎に角それではお氣の毒ですネ。』

夏子は少し頭を傾げて何だか考へ込むやうな風をした。

『音無君、久し振だからどつかへ行つて一緒に御飯でも食べて来よう。そしてこゝへ宿りたまへ。』

淀野が斯う言つた時音無は心から嬉しさうな顔をして、

『有難う。しかしエスピオンが来ますよ。』

『大丈夫、そんな事に對しては僕等夫婦は何とも思つてゐやしない。』

『有難う、では四五日御厄介になります。』

音無は初めてくつろいだやうに椅子にもたれかゝつて壁の油繪を眺め廻した。

翌朝音無はミス・フラワアから一通の手紙を受取つた。夫れは是非面會したい事が出来たからすぐ来て呉れとの意味であつた。で、朝御飯をすますとすぐ横濱へ出かけて行つた。貞子の入學が俄かに許されないと云ふのでは無からうか。或は子供を預る人が出来たから其人に會へと云ふのでは無からうか、などと車中でいろんな事を想像しながら傳道女學校へ行つて見ると、

ミス・フラワアは少し當惑したやうな顔付で音無を迎へて、

『音無さん、私、田原さんネ、是非御世話したいのですよ。しかし子供さんを預る家が見付からないので困ります。どうしませうかね。』と言つた。

『寄宿舎へ一緒に入れて下さつたらどうせう？』

『それがネ、お一人が坊ツちゃんでせう。私の學校では男のお子は決して預らない事にきめてゐます、今まで能く十一二になる男の子を伴れて寄宿したいツて申込がありました、私それを御断りしてゐます。』

『では舍監のお方の自宅へお預り願へませんか。』

『私、最初から其のつもりでした。けれどもそれが……』

音無には大體の様子がわかつた。昨日の男が舍監の所へいろんな事を訊きに行つたので俄かに恐氣おぢけがついたのだと想像された。で、それから一時間ばかりいろ／＼と相談したが、結局音無の思ふ通りにならなかつた。

『ね、音無さん。私本當に田原さんを入學させて上げたいのです。お子さんの事を何とかお

考へ下さいまして、田原さんをこゝへお入れ下さい、私、十分お世話致しますから、』と言つたフラワアは優しい眼で音無の顔をちつと見詰めながら『ねエ、お國にはいろいろの習慣がありますから……私は小鳥のやうに自由ですが……』

音無は黙つて考へて居たが、ふと昨日出會つた北井の事を想ひ出して、

『今日は土曜で學校もお休みのやうですから、私、北井さんと御相談致します。』

『それはよろしいです、こゝへ北井さん呼びませう？』

『いゝえ、私はこれから友人の佐藤君を訪問したいので北井さんに案内していただきます。』

『さう？ では北井さんにも其の子供さんを御預りする家を考へて置くやうに言つて下さう。』

『えエ、無論御相談して見ませう。』

音無は校長と握手して訣れた。

『北井さん、やつぱり貞子さんたちも親子別れ……に暮すつて事はよくないネ。』

音無は公園のベンチに腰を掛けながら言つた。

『駄目ですよ、先生そんな事が出来るものですか。本當に心からお世話して上げたいと言つて彼の哲子さん丈太郎さんをお預りする人があつたとしても、長い年月の間にはきつとごたごたが起るにきまつてゐますワ。それに強いて預つて下さいつて頼んだりして、それがうまく行くものですか。』

『ねエ、僕もさう思ふ。どうしようか知ら、もう電報を打つたのだから、家を疊んで四五日中には新宮を出立するだらうし、と言つて今更見合せよと言つてやるわけには行かず……』

『先生、田原の奥さんは、どうして俄かにお子さんを抱えて傳道學校なんかへお入りなさらうと決心なすつたのです？』

『それにはいろいろ込入つた事情があるんだよ。なにも單に亭主に死なれたからと云ふばかりぢや無いんだ。』

『ねエ、さうでせう。何か深く感じなすつた事があるに違ひありませんワネ。どんな事なんですか？ 先生は御存知でせう？』

「知つてると云へば知つて居るんだ……人生でものはずるぶん可笑しなもんだ。」

「どんな動機で新宮を引拂ひなさるやうになつたの？」

北井は音無の側へ摺寄るやうにして腰を掛けた。

「人間てものは大きな敵よりも案外小さい敵に負けるもんだネ、僕は近頃つくづくそんな事を考へてゐる。」

「大きな敵小敵ツてどんな事？」

「貞子さんの事で考へて見てもさうだ。田原君がフィと家を出てしまつたのは去年の六月だつた。そりやア一家の大黒柱に行方不明になられたんだから、貞子さんの悲しみツてもものは譬へやうの無い程でしたらう。けれども貞子さんはぢつともちこたへたです。けなげな程しつかりした覺悟でゐられました。それから九月の中頃に田原君が亡くなられたといふ電報を受取つた時も、マダ貞子さんは覺悟の臍はらをかためて、どうしたツて自分はこゝに踏止つて二人の子供を育て上げて立派に見よう。世間が何と言はうが、かと云はうが、飽まで此の町で戦つて見ようといふやうな勝氣が有り過る程ありました。」

此の一月の二十四日に田原君の葬式をしたあとで、あの船町の家を引拂つて、中ノ町の宅へ引越したのですが、なにさまあなたも知つての通り彼の一族は頗る自我の強い人達ばかりですから、貞子さんも餘程苦しかつたでせう。全く我々には想像も出来ないやうな事件が三日にあげず突發して、それが爲めに貞子さんは毎日毎晩ぢつと齒をくひしばつて我慢してゐたが、一つどうしてもこらへ切れない事件が起つたのです。」

「こらへ切れない事件？ どんな事？」

「それが僕の所謂何でも無い事件なんです。たしか此の七月頃でした。僕は久し振りで貞子さんの家をお尋ねして玄關から案内を乞ふと、出て來た貞子さんはまつかな顔をして、黙つてかう右の手を振るんです。僕は何か大事件でも起つたのだと思つて直ぐ引返したのですが、何となく氣懸りですから夕方又た伺つて見ると、貞子さんはいつに無くげつそりしよげ込んで居るのです。どうなすつたのですかツて尋ねても何とも言ひませんでした。わけは申されませんでした。が、何となく其後貞子さんはめいつて行くのでした。僕もどうかして其の原因を知りたいと思つて氣をつけて居たのですが、二月程以前にこんな事があつたのです。」

音無はオヴァアコートの襟を一寸直し乍ら北井の顔を横目に見た。
『どんな事が?』

北井は貞子の身の上に落懸る大事件を豫想しながら訊いた。

『それが又た何でも無い事なんだ。僕は二月程以前に東家君と二人が高芝村へ旅行してあすこの串本屋へ泊つたのです。』

『串本屋、あゝ私、知つてますワ。』

『あすこのかみさんと東家君との會話を僕は傍で黙つて聞いて居たのですが、あのかみさんはなかくしつかり者ですネ。』

『えエ、えらアいかみさんですワ、何でも旦那さんに死訣れなすつたんでせう?』

『さうだつて、夏の熱い日に鰹魚を釣りに行つたきり、歸つて來ないんださうだ。屍體も上らなければ舟も見えないんだツてネ。』

『さう? そんな悲惨があつたのですか。』

『ところが、あのかみさんの言ふ事が面白い。(もう夫れから十三年にもなるんぢやが、どう

したツて亭主が死んだとは思はれない。もしも海へ落込んだのなら海の底で無事に生きてゐるやうに思ふ。誰でもお前の亭主は此の下に居ると教へてくれる人があつたら、私は今でもそこから海の中へ跳び込んで見る。) ツてかう言ふんです。つまり亭主が今に生きてゐると信じてゐることが、あのかみさんの生命なんだネ。』

『では亡くなられた主人はかみさんの心の中にはつきり生きてらツしやるんですネ。』

『まアさうなんでせう。かみさんと東家君とは十二時頃までいろんな話をしてゐたが翌朝僕達は森浦まで引返して來て、あすこで巡航船を待つ間に東家君は海の景色を二枚寫生しました。』

それから十二時頃に巡航船が着いたので、僕等は五六人の旅客と一緒にそれへ乗込むと運轉手が出て來て僕達に次の船まで待つてくれるツて言ふんでせう。機械に故障でも出來たのかと思つて理由を訊いて見ると、此の船へは普通のお客様は乗せないツて言ふのです。』

『普通のお客様? どんな事なんです?』

『ねエ、面白い言葉でせう。東家君は其の言葉が癪に障つたと見え、普通のお客様を乗せないで誰を乗せるんだい!』と言つたのです。すると船室の中から八字鬚を伸した男がひよいと顔

を出して直ぐ引込んでしまつたのです。東家君は其の男の顔を見た時、大聲で、(何故我々を乗せないんだ、理由を言へ!)ツて嘯鳴ると、運轉手が東家君をなだめるやうに、(今日は鐵道院から局長さんがお出でになつたので、佐原さんが此の舟を借切つたのですから、どうぞ次の船までお待ち下さい。)ツて頼むやうに言ふのでせう。其時僕はもう濱へ降りてゐたのです。しかし東家君はなか／＼降りないで頻りに大聲で佐原とかいふ男を罵倒してゐました。しかし幸に其所へ巡航船が一艘入つて來たので、僕はそれへ乗つて歸りました。それから僕は翌日貞子さんを訪問して申本屋のかみさんの話やら佐原といふ人と東家君との嘯鳴り合つた事を詳しく話したのです。僕は何の氣無しに面白可笑しく話したのですが、貞子さんは其の話に大變感激してしまつてほろ／＼涙をこぼしなされるんでせう。」

『どうなすつたのでせう? それは……』

『それは僕にも解らない、が、しかし大體は察しられる、申本屋のかみさんが亭主は死んだと思はない。やつぱり海の中で無事に生きてゐると思ふと云つた言葉が貞子さんの神経を非常に刺激したらしい。それから貞子さんは佐原といふ人の事に就いて私にこんな事を話しました。』

(此の夏あなたがお出で下すつた時、私は玄關からお歸り下さいツて手まねで申したでせう。あの時は佐原さんがお出でになつてゐたのです。)

貞子さんはそれだけ言つて暫らく黙つて俯向いてゐましたが、たうとう一時間ばかりもかゝつて私に佐原さんの事を詳しくお話しなさいました。それはつまり佐原さんが若い頃、貞子さんのお隣りに住つてゐて、よく貞子さんを知つてゐたといふのです。其の佐原さんはもう立派な養子もあり孫もある身分ですが、貞子さんの所へ來て度々いろんな事を言つたのださうです。子供二人の教育を引受けてやらうとか、さう鬱いでゐてはからだの爲に悪いから遠方へ旅行したらよいだらうとか。無論佐原さんは財産家だし立派な紳士ですから決して卑劣な心からそんな事を言はれたのでは無いでせうが、それが又た貞子さんの心を非常に刺激したらしいのです。つまり自我の強い親戚達ばかりの中へ、さうした異性からの不意の深切が現はれたといふ事は貞子さんに取つては奇蹟だつたのですネ。しかし貞子さんはキツパリ佐原さんの厚意をしりぞけておしまひになつたのです。すると佐原さんは非常に落膽して、(自分はあなたとあなたの一家に對して本當に清い心で同情してゐたのだが、そんなに誤解され排斥せられるのは

なさけない)ツて泣きながら言はれたさうです。』

『佐原ツて云ふ人は貞子さんを本當に愛してゐたのでせうか。それとも劣情の爪を磨いでゐたのでせうか。』

『それは僕にもわからない、佐原ツて云ふ人は田原君と交際もしてゐたらうし、心から遺族に同情してゐたのかも知れない。しかし貞子さんの執られた方法は賢い。』

『本當に佐原さんにそんな清い厚意があつたのでしたら、それを退けるは可愛さうでせう?』
『いゝえ、僕はさう思はない、人間といふものはさうしたものでない。打明けて言へば僕だつてさうだ。此間中から貞子さんの爲に全然没頭して奔走してゐるが、深く考へてみれば此れも一種のラヴだ、斯う言ふと直ぐあなたは(下らない!)と仰しやるでせうが、僕は自分を其の下らない人物として観る時が度々ある。總て人間といふものは心の戸を全く打開けて話し合ふ程度の交際をする時、もうそれは一種のラヴだ。佐原といふ人だつて眞の同情から貞子さんの世話をしようと云つた所で、いつしかそれは普通のラヴに變つて来る。貞子さんには丁度申木屋のかみさんのやうに、田原君といふ人がチャアンと心の中に生きてゐるんだ。よし遺骨は受

取つても、葬式はしても、心の底の底を叩いて見れば決して田原君が此世から消えてしまつたとは思はれないのでせう。そこへ如何に親切であつても同情であつても佐原といふ人の影がさして来る時、貞子さんは意地悪を言つていぢめに來る人達よりも、下らない事を言つて有りもしない噂を立てる人たちよりも、佐原君が憎くなるのでせう。やア／＼言つていぢめる人たちは貞子さんの心を益々明るくして、そこに田原さんを活かしてくれるが、同情や親切で心に黒い姿を映されるのは貞子さんには堪へられなかつたのでせう。それとも彼の佐原といふ男が、本當につまらない男であつて、貞子さんはそんなけがらしい事を聞かされた以上、一日もあの土地に居られないと思ふ程腹を立てたのかも知れない。僕にはどつちだか深い理由はわからないが、一ヶ月程前に貞子さんが教會へ來て(音無さん、私ネ、五六年の間全く尼さんになりすましてこんな世間から暫く離れてみたいのです。方法がありませんでせうか。)ツて言つた時、僕は其の言葉が眞實貞子さんの心底から湧出したものだと思ひました。で、早速神戸へ行つて伊賀君とも相談してこゝまでやつて來たのサ。』

音無は小さい溜息を洩して靴の上をちつと見詰めてゐた。

『少ウし、私にも貞子さんのお心がわかたやうですワ。』

北井は起ち上つて軽く膝の所を撫でながら、『では、アグネス修道院へお入りになつたら如何です?』と言つた。

『アグネス修道院? あの芝の?』

『えエ、あすこはきつとそんな境遇のお方を收容して下さるでせう?』

『さうだね、では今日歸りがけに一寸立寄つて見ようか知ら……』

『あすこの院長さんと……それ、あなた御承知でせう、彼の松本時子さんと大層親しくしてらツしやいますよ。私、松本さんにたび／＼お遭ひしましたワ。』

『えツ? 時子さんとその修道院長と親しいんですか。』

音無は不可思議な響を聞いたやうに、ギョツ! として北井の顔を見上げた。

つめたい風が二人の間を吹いて公園の常盤木がザワ／＼と揺めいた。

『本當に能くお出で下さいましたのネ、私、心から御禮申しますワ。』

時子は呻に頭を下げた。

『僕も石塚君が早速来て下さつたのを嬉しく思ひました。』

音無は覺也の顔をチラと見ながら言つた。

『私は丹波の方へ聖書販賣に行つてゐたのですが、丁度豫定の行動を終へて伊賀君の宅へ戻つて居たので、音無君の電報を受取ると直ぐ出發して來たのです。』

覺也は左の指で薄い八字鬚を撫でながら言つた。

『私の身の上から申上げますワ。どうぞ音無さんも石塚さんも虚心平氣でお聞き下さいまし、私、大膽に申上げますから……』時子は例の如く頭を少し傾げて、膝の上で揉手をしながら、

『私、赤島温泉で石塚さんに一寸お話し致しました通り、亡くなつた堅爾さんと結婚の約束は致しました。しかも戸籍上の手續も致しました。だけど私、たうとう夫婦にはなれなかつたの。

幼馴染の堅ちゃん時代を想ひ出して其うちには尊敬も出来、愛情も起るだらうと思つてゐましたのですが、幸か不幸か私は堅爾さんに身も心も許す事が出来ませんでした。田原さんの家出をなすつた後で私は呼寄せられて東京から新宮へ参りました。そして太地家の財産をすつかり私の名義にしてしまつたのも事實です。彼の場合あつた處置を執るのは本當に没義道ちぎだうのやうでございましたが、私一人が悪者になればいいのだと思ひまして、あんな非常手段を講じたのでございます。現在血を分けた實子に財産を譲らないで嫁の名義にしてしまつたといふについては、本當にどんな誤解を受けても致方が無いのでございます。世間では單に田原さんとの關係を疑はれるのが恐ろしくつて、あんな卑怯な事をしたと思つてゐるでせうが、あれには込入つた事情がございますのです。私と堅爾さんとは龍神温泉場で結婚の約束をしてしまひました。そして太地のおツ母さんも京都までお出で下すつて吉田教會で、日高さんのお世話で式は挙げましたが、翌日私はすぐこちらの方へ出立したのでございました。世間の人達は結婚式といふ形式と精神的の夫婦になるといふ事とをごつちやにして考へて居なさるんでせう。私、夫れを大變な間違ひだと思ひますので、私は式は挙げたが其のまま東京へ来て圖書館へ通つてゐま

した。ところが一週間ばかり経つておツ母さんから悲しい手紙を受取つたのです。其手紙には（結婚式を舉げて置きながら、夫と別居するといふ不自然な事に對しては、自分も最初反對ではあつたが、それは大變いゝ事であつた。あなたが東京へ行つた後で、堅爾とわたしと二人が同じ室に寢てゐると、夜半頃に堅爾はむっくりと起上つて、『白い者！ 白い者！』と恐ろしさうな顔付をして言つてゐた。堅爾の父親は二十八九の歳からやつぱりあの『白い者』に脅やかされたのであつた。そして遂には何にも言はないで黙り込んでしまつた。堅爾も可愛さうだが親の遺傳で、同じ病氣に罹つたのだ。）ツていふ意味が書いてあつたのです。しかし私は軽度の神経衰弱だ位に思つて絶えず手紙を往復して慰めてゐました。ところが突然田原さんの家出事件があり、私までが警察へ喚出されたので、紀州へ歸りましたが、おツ母さんの觀察では、どうもあつた事件のあつた所へ堅爾さんを置くのはよよからうと云ふので、私は直ぐあの財産の處置を付けておいて、暫くの間赤島温泉に隠れてゐたのでした。おツ母さんのお話によると、亡くなつた父親といふのは死ぬ前に可なり浪費わづかひ散らしたらしいのです。堅爾さんの病もきつとさうなるだらうと云ふので、萬事おツ母さんの指金で私の名義にしてしまつたのです。

それから或晩堅爾さんは、おツ母さんのお室へ入つて行つて、(今に此の町の人達が押寄せて来て僕を演に引張つて行つて袋叩きにする!)ツて顔色を變へて言つたのださうです。おツ母さんは御自分の夫を介抱なすつた経験がありますので、そんな事があつた後で直ぐナオミさんと須基子さんとを暖い所で暫く静養するやうにと申して旅立たせなさいましたのでございます。其後堅爾さんは京都で暫くおツ母さんと一緒に暮してゐなすつたのですが、どうしても病氣が思はしく無かつたのです。勿論他人様には、ちつともかはらないのですが、時々變な事があるのです、昨年の暮にたうとう思ひ切つて根岸の病院へ入院させたのでした。病院では毎日農業經濟の書物を翻譯してゐるので、看護人達も何だか病院の事を研究にでも來てゐるの位にししか思つてゐなかつたやうでした。私も時々訪問してみました。其の翻譯を読んで見ますと段々々々減茶々々になつて行くのでした。入院の當時、院長さんが二三ヶ月も居れば全快するだらうと申すので、たとへて退院しても私だけは堅爾さんと同居しますまいと思ひまして、こゝに獨りで住つてゐたのでございます。所が堅爾さんは……堅爾さんはたうとう病院で亡くなりました。』

さすがに時子はホロリとして俯向き込んでしまつた。音無も覺也も、もう時子の言葉を寸分疑ふ餘地は無かつた。

『そんな悲惨な事があつたのですか……』

音無は太息をつきながら言つた。

『ちツとも知らなかつたもんですから……』

覺也も腕をこまぬいたまゝ、眉間に縦の皺を寄せながら涙ぐんでゐた。

『私も幼馴染の堅爾さんは愛してあげる事も出来ましたが、たうとう大人になつての堅爾さんは愛してあげる事も尊敬してあげる事も出来ませんでした。それは本當に私に取つても堅爾さんに取つても不幸な事でございます。けれども……けれども音無さん、石塚さん、私は唯一つの善事をしたやうに思はれます。』と少しく時子は躊躇して、『そんな遺傳を残さなかつたといふ事は私が社會に對する小さい貢獻だと思ひますの。こんな事は何でも無いやうな事でせうけど、結婚式結婚届も済んでの上に、社會に對して此の義務を盡したツていふ事は、私に取つては本當に苦しい大きな事業でした。それが爲にはいろんな悪評も立てられ、堅爾さんに

も氣の毒でしたが、そんな恐ろしい遺傳をもつてゐる人と知らずに輕卒に結婚したのが悪かつたのですから、萬事私一人で其の重荷を背負ひました。しかしもう私は太地家の財産をすつかり須基子さんのお名前に書替へましたから……』

時子は覺也の顔をジロ／＼と眺めて居たが、鈴のやうな眼から溢るゝ熱い涙は美しい白い頬を傳つて流れた。

『呀、時子さん、丁度いゝ所でした。今お末を迎へに遣る所でしたのよ。』

ナオミの顔には唯事ならぬ事件の發生を暗示してゐた。

『須うちちゃんがお悪いの？』

『えエ、さうなのよ、風邪だ／＼ツて梶木さんが仰しやるもんだから其のつもりで安心してゐたのですが、餘り熱が冷めないのよ、今朝東京病院の高村博士に来ていたゞいたら、高村さんはかう仰しやるのよ。(結核性の腦膜炎だからこゝろ二三日の中に意識が朦朧になるだらう。)
ツて、私、本當に驚いてしまひましたワ。』

ナオミはまぶちに涙を一杯溜めながら、時子を見上げた。

『大變ネそれは、おツ母さんにもう其の病狀をお話し下すつたの？』

『いゝえ、御隠居様も少し御氣分がお悪くツて今朝からおやすみでゐらツしやいます。』

『困りましたネそれは……とにかく私、おツ母さんにお目にかゝりますワ。』

時子はナオミを玄關に残し置いて裏坐敷へ入つて行つた。

『おツ母さん、お加減がよろしくないツて、いかゞでございますか……』
元氣付けるやうに言ひながら襖を引けると、丁度お常は半身を起して藥をのまうとする所であつた。

『お待ち遊ばせ、お湯をくんでまゐりますワ。』

時子は枕もとにあつたコツプを提げて勝手の方へ出て行つた。引違へにナオミがあわてたやうに入つて来て、

『御隠居様、唯今、音無さんと石塚さんとお見えになりました。』

『え？ 音無さんと石塚さん？』お常には其の言葉が信じられないやうであつた。

『えエ、一寸お目に懸りたいと申しまして……』

言つてゐる所へ時子が入つて来たので、お常は時子の顔を眺めながら、

『今、音無さんと石塚さんがお見えになつたツて？ あなたはもうお會ひ申したの？』

『えエ、今朝程お二人でお尋ね下さいまして……いろ／＼とお話を承りました。』

『石塚さんはどうなすツてゐらツしやるの？』

『神戸の方で貧民傳道をなすツてらツしやる伊賀さんのところにゐらして、聖書會社の方に働いていらツしやる御様子でございます。』

『お達者でゐらツしやるんでせうネ。』

『え／＼大變お丈夫で、新宮時代とはちがつて圓滿なお方にお成りのやうです。』

『さう？』と言つてお常は一寸考へてゐたが、『少し音無さんとも御相談せねばならない事がありますから、音無さんだけ、こちらへお通し申して、石塚さんには明朝でもお出で下さるやうに……お宿はお末にいひつけて品川のどこかへ御案内するやうにして下さいまし。』

『は、畏りました。では、私、ぢかに石塚さんにさう申し上げますワ。』

時子は玄關の方へ急いで出て行つた。そして暫くして、音無を先に立て、お常の室へ入つて来た。

『まア、音無さん、何と御挨拶申してよろしいやら……』

お常が靜に頭を下げた時、『先生！ ナオミ先生！ 早くお出で下さい、早く／＼！』とお末

のけた、ましいい聲が聞えたと思ふと、續いてガチャーンと物を投げるやうな響がした。

『須基子さんのお部屋!』言ひながらナオミは色を變へて飛出して行つた。時子もあわて、後を追うた。お常も呟きながら後について出た。

『どうなすつたのです?』と言ひながら音無はお常を扶けながら其の室に入つて見ると、

『馬鹿よ! お末は本當に馬鹿よ! あたしの頭に大きな大きな石を載つかけたり、針でキユツ／＼と突刺したりするんですもの……』

言ひながら須基子はトロリとした眼付で蒲團の上に靜かに仰向いてゐる。上蒲團が半分ばかり撥ね返されて、水枕と氷嚢とが坐敷の隅の方に投げられてあつた。

『どうしたと言ふの? 須基子!』

お常は叱るやうに言つた。途方に暮れてゐたナオミは水枕を提げて来て、そつと須基子の枕の下に入れようとしたが、須基子は右の手で強く夫れを撥ねのけながら、

『そんな大きな石を持つて來なさるのはどなたです? 私を殺しなさるおつもりなの?』と言つて兩の手を自分の眼の前で交互に動かしてゐる。

『まアびつくりしました事、今、お嬢さんは御自分のおぐしをぐつと引張りなすつて、水枕も氷嚢もみんなお投げになつたのでした。』

蒼白くなつてブル／＼顫へてゐたお末は氷嚢を提げたまゝ障子の側に立つてゐる。

『末! 早く梶木さんの所へ行つて、今直ぐお出で下さい……早く行つてらっしゃい!』

お常はさう言つて置いて、須基子の顔をぢつと覗き込んだ。

一時間ばかりたつて醫者の梶木は入つて來た。脈をとつて見たり驗をひつくり返して見たり脛を叩いて見たりしてゐたが、『ふうん!』と小さい溜息をついて、『御隠居様、一寸……』とお常を廊下の方へ誘ひ出して行つて、何だかひそ／＼と話してゐたが、梶木は再び入つて來て須基子の枕もとに座つた。

一座には驚愕と危惧の空氣がみなぎつた。

『時子さん、ちよいとこちらへいらっしゃい。』と呼んだのはお常の聲であつた。

『は、』と小さい聲で答へて出て行つた時子は暫くして廊下の外から襖を少し開けてナオミを手招いた。ナオミの出て行つた後で、音無はワク／＼と慄えながら、梶木の側へにじり寄つて小さい聲で、『病名は？』と訊いた。

(490)

梶木は側にあつた處方箋へ『結核性脳膜炎、既に頸部硬直、意識朦朧。』と書いて見せた。音無は思はずギクリ！として少しく伸上りながら、恐ろしいものでも見るやうに須基子の顔を覗いた。須基子は頻りに両手を眼の前で動かしながら口の中で何事かを呟いてゐた。聴て高村博士と一緒にお常もナオミも入つて來たが時子だけは見えなかつた。

博士の診察では二三日異常は無からうと言ふのであつた。

音無は貞子の事が氣懸りなので、六時頃に太地の家を出て歸りがけに覺也の宿を訪ねて見たが、太地からの使で唯た今出て行つたといふので其のまゝ富士見町の淀野の所へ歸つてみると貞子から『明日立つ、』といふ意味の電報が來てゐた。

翌る日の午前十時にはアグネス修道院の院長ミス・イーストに面會して、貞子等母子三人の事を頼む筈になつてゐたので、音無は九時前に淀野の家を出た。

行つて見るとミス・イーストは非常な好意を以て快く三人を預る約束をしてくれた上、

『お嬢さんと坊ちゃんただけは毎月十圓づゝお出しなさい、おツ母さんは聖書を研究なすつたり音楽を習ひなすつたりして専心御勉強なさい。お金は少しもありませんから、』と言つてくれた時、音無は本當に大きな重荷をすつかり肩から卸してしまつたやうに嬉しく感じた。

『それでは本人が参りますと、すぐ伴れて参りますから……』

『いゝえ、あなたがお伴れ下さらなくてもステーションからこちらへ直ぐにドシ／＼お出で下さい、にせの田原さんはありませんでせうから……』

イーストは人の善ささうな顔をして笑つた。

『有難うございました、何分宜しく……』

(491)

音無とイーストとは貞子ら三人の爲めに神の祝福を祈つて訣れた。

音無は其の足ですぐ太地の家へ行つて見ると玄關には二足の靴が脱がれてあつた。

『御免下さい！』とあわてゝ言ふと、『音無さんですか……』と答へながら出て来たのは時子であつた。

『どうです？ 其後は？』

『いけませんの。今、高村博士が診察してゐて下さるのですが、もう餘程意識が亂れてゐますのよ。』

『さう？ 夫れはいけませんネ。』

音無は時子に導かれて病室へ入つて行つた。そこには覺也も来てゐた。枕もとに坐つてゐた博士は、

『暫く様子を見た上で、食鹽注射をして見ませう。まだ幾分か意識があるやうですから、お言葉でも掛けたい御希望の方は今のうち掛けて御覽なさい。こんな事は申上ぐべき事ではありませんが……』と云つて次の室へ起つて行つた。

ナオミはぼと／＼涙を流しながら、『須うちやん！ 須うちやん！ 私がわかッて？』と言つて顔を覗き込んだ。

『古座ナオミ先生……先生のおぐしは綺麗ネ』

『須基子！ わ、わたしは……』

『大事の／＼お婆アさまだワネ……』

『さうか、／＼、能く言つておくれだ。』

お常は涙を飲込みながら須基子の右の手を取つて二三度振つた。

音無は覺也を伴れて来て枕もとに坐らせた。

『須基子さん、此の……此のお方を御承知ですか。』

音無は覺也の肩に手をかけて揺ぶりながら涙聲で言つた。須基子は可愛い眼を見張つて、

『石塚さん……新聞社の石塚さん……』と細い聲で言つた時、お常は急に少しく伸上つて、

『須基子！ 其のお方はネ、今日から太地覺也さんだよ、太地覺也さん……わかりましたか。』と言つた。音無もナオミも思はずお常の方を振向いて見た。しかしお常は正氣であつた。

『太……地覺也さん、夕……イ……ヂ……』

須基子は頻りにぐるりを見廻すやうにして、両手で眼の前の空を掴んだ。

『須基子！ 太地覺也さんだよ。』とお常は須基子の方に念を押して置いて、『石塚さん、あなたは本當に能く来てやつて下さいました。もう二三日も遅くなれば、此の娘はもうお顔を見かける事も出来なかつたでせう。私は、私はあなたにお約束申した事を決して／＼反古には致しません、あなたは彼の約束の日からもう太地覺也さんだつたのです。今、須基子の口から唯ツタ一口でも『太地覺也さん』と言つただけでどうぞ私の約束を果したものとお思ひ下さいまし。さるかはりどうぞ、あの罪もとがもない須基子を妹だと思つて……どうぞ妹か姪かだと思つて斷末魔を見届けてやつて下さい。ね、覺也さん……もう石塚さんとは申しますまい……あアあ、私も何十年來随分苦しい目に會いました。しかし……』

お常の聲は曇つてしまつた。一座はみな涙の中に閉ぢ込められた。

『どうもお氣の毒だが、いけないやうです、しかし最後まで盡すだけは盡しませう。』

いつの間にか須基子の手を握つて脈搏を診てゐた博士は次の室に居る梶木をさしまねいた。

博士は食鹽注射をする爲に須基子の雪のやうな白い胸をあけて小さい脱脂綿の斷片で右の腋の下を拭き初めた。一同の視線は悉く須基子の體に注がれた。

小さい猪口を伏せたやうな可愛い乳房が、ぶくりと膨れて、清かつた十六年の生活を物語つてゐた。

博士は二本の太い注射針を無さうさに皮下へ突き刺した。そして梶木の方へ合圖をすると、

梶木は恐る／＼二聯珠を握つて、コルペンに空氣を送り初めた。

覺也は音無とお常との間に座つて、戦く手に堅くハンカチーフを握りしめながら須基子の白い胸を見詰めてゐた。時子は覺也の後に坐つて其の脊に額を押付けながら啜り泣いた。

護膜管を傳つて食鹽水が須基子の皮下へ送られるのを見た時、一同は堪へ切れないやうな顔付をして博士の所作を必死に眺めてゐたが、梶木の手にしてゐた二聯珠の握りやうが厳し過ぎたと見え、ボン！ と短銃でも射つたやうな大きな響きがして、コルペンは粉微塵に碎けてしまつた。

けれども須基子の閉ぢた眼は開かれなくて、苦しうな息使ひが依然として室の外までも聞

えてゐた。

『注射はもうよませう。十分廿分の生命を延した所でしやうもありますまい。』

顫えながら冷酷に言放つたのは音無であつた。博士は小くうなづきながら、

『遠方から御面會にお出でるお方でもございますならば……』と言つた。

『いゝえ誰ありませんが……』とオロ／＼聲で言つたお常は、『ぢやア、先生もう此の子の生命はどうにも仕様がありませんのでせうか。』

『確實にどうと言ふ事は申されませんが、今日の私共のもつてゐます知識では、此上食鹽注射をすれば、半日か一日の生命を延す事が出来るだらうと、申上げるより外ありません。』

『わかりました！』とお常は深くうなづいて須基子の顔を差覗いたが、其のまゝ疊に喰ひ付くやうに泣倒れてしまつた。

『音無君、須基子さんはマダ洗禮を受けて居なかつたのだ。息あるうちに授洗してあげて下さ

さ。』

覺也の聲に勵まされて音無は頭をもたげながら、『御隠居様、お差支はございませんでせうか。』

『此の娘の両親の行つて居る所へ此の娘を遣つて下さい。そして私にもどうぞ洗禮をお願い致しますせう。』

『え？ 御隠居様も？』

『えゝ、長い年月、私もずるぶん魂を頑固にして無宗教でゐましたが……今須基子と一緒に洗禮を受けます……』

ナオミは勝手元に行つて行つて、硝子の皿へ水を盛つて提げて來た。音無は先づお常に洗禮を授けて、夫れから須基子の枕もとに坐つたが、皿の中に浸した右の手の爪先が顫へて、かち／＼と其の底に觸れる小さい音が夢のやうに聞えた。

父と子と……聖靈の名により……太地須基子に洗禮を授く……

とぎれ／＼に辛うじて終まで言ひ得た時、須基子は右の手を少し動かしたと思つたが、兩の眼をパツチリと開いて天井を見るやうにした。美しい額には洗禮の水が玉のやうに光つてゐる。

覺也も時子もナオミも額を一つ所にあつめて、

『須基子さん！ 須基子さん！』と呼んだが、何の返事もせず又た眼を閉ぢた。

五分間程同じ呼吸が続いたと思ふと、何かに驚かれさたやうに一寸眼を見開いたが、俄かに呼吸の様子が變つて來た。

『高村先生……須基子さんが……』とナオミは泣きながら呼んだ。次の室から駈け込んで來た博士は須基子の右の手を握つて考へてゐたが、

『どうもお氣の毒さまですが、』と言ひながら一寸眼を引開けて、『曙光は全く開いてしまつ

た……』と呟いた。

『あ、須基子……お前はもう死ぬのか……』お常は須基子の肩先に膝を突つけて泣いた。

『石塚君、最後の握手をしてあげなさい。マダ息あるうちに……』

音無は眼に涙を泛べながら勵ますやうに言つた。

覺也は何も言はずに須基子の右の手を堅く握つてぢつと其の顔を見詰めてゐた。

『須うちやん！ 九年の永い間、よろしく私の言ふ事をおとなしく聞いて下さつたのネ。須うちやん！ 天國で待つてゐて下さい……』

ナオミは左の手を握つてほろ／＼と須基子の胸の上に涙を落しながら、蒼白い美しい顔を覗き込んだ。

須基子の呼吸は一刻一刻に薄れて行つて、かすかに頭を動かしたと思つた時、

『あ、最後です！』と博士は音無の後から言つた。一同は死んだ人のやうに、びたりと一時に静まり返つた。石のやうな冷たい沈黙が室内を鎖した。

我等の心強し、最も願ふ所は身を離れて主と共に居らん事なり……
音無は哥林多後書五章の八節を明瞭に暗誦した。

——を は り——

大正八年十二月廿七日印刷
大正十五年十月十九日改版

宿命

□定価金二圓八十錢

版 權 所 有



著 者

東京市外下落合千五百十番地
沖野岩三郎

發 行 者

東京市京橋區南金六町九番地
福永一良

印 刷 者

東京市京橋區瀧山町五番地
渡邊吉郎

版 元

東京・銀座・新橋

福永書店

電話銀座一六九九番
電話日座東京四〇四六番

◇ 目書行刊店書永福 ◇

| | | | | | | | | | |
|--------------------|-----------------|-----------------|----------------------|--------------------|---------------------|--------------------|---------------------|--------------------|---------------------|
| 遺著 齋藤鶴磯 覆刻 | 宮崎滔天著 | 坪内逍遙著 | 横山正幸 トオアエ原作 幸譯 | 木下利玄著 | 井手訶六著 | 岡本鶴松著 | 賀川豊彦著 | 賀川春子著 | 賀川豊彦著 |
| □ 武藏野話 | □ 三十三年之夢 | □ 未來の夢 | □ アールの女 | □ 青集 | □ 炬を翳す人々 | □ 異國の華を尋ねて | □ 永遠の乳房 | □ 女中奉公と女工生活 | □ 地殻を破つて |
| 定價金四圓五十錢 送料金二十錢 | 定價金二十錢 送料金四圓 | 定價金二十錢 送料金四圓 | 定價金一圓六十錢 送料金十八錢 | 定價金二圓三十錢 送料金二十錢 | 定價金二圓八十錢 送料金二十四錢 | 定價金一圓九十錢 送料金二十錢 | 定價金二圓五十錢 送料金二十二錢 | 定價金一圓四十錢 送料金十八錢 | 定價金二圓八十錢 送料金二十二錢 |

391

441

終

